

2026年3月19日  
第6回GX加速化研究会

農林水産業におけるネイチャーポジティブ：  
科学的定量化に基づく農林水産関連自然資本への  
資金還流と面的展開支援のツール群

久保田康裕（株式会社シンク・ネイチャー）



自然資本への投資が評価され、  
豊かな社会へとつながる世界を  
実現する。

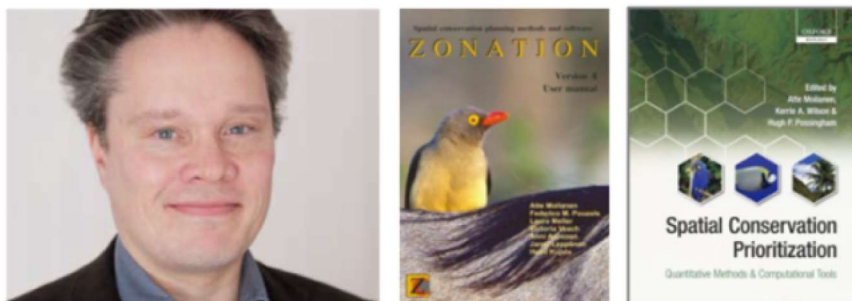
科学的アプローチで、機関投資家・金融機関・企業・行政を支援し、  
そして自然の主流化(教育普及)まで一貫した統合戦略で、  
「自然への投資」が評価される状況を創出します。



## フィンランドR&D拠点のご紹介

科学的アプローチによるネイチャーポジティブビジネスを推進するに当たり、弊社はフィンランドにR&Dの拠点を設立いたします。生物多様性保全科学の世界トップ研究者である、アッテ・モイラーネン教授（ヘルシンキ大学・自然史博物館）を最高科学責任者として招聘し、ネイチャーポジティブビジネスに関わる技術開発を推進いたします。

### チーフ・サイエンス・オフィサー（CSO）の招聘



## アッテ・モイラーネン博士

前・ヘルシンキ大学教授

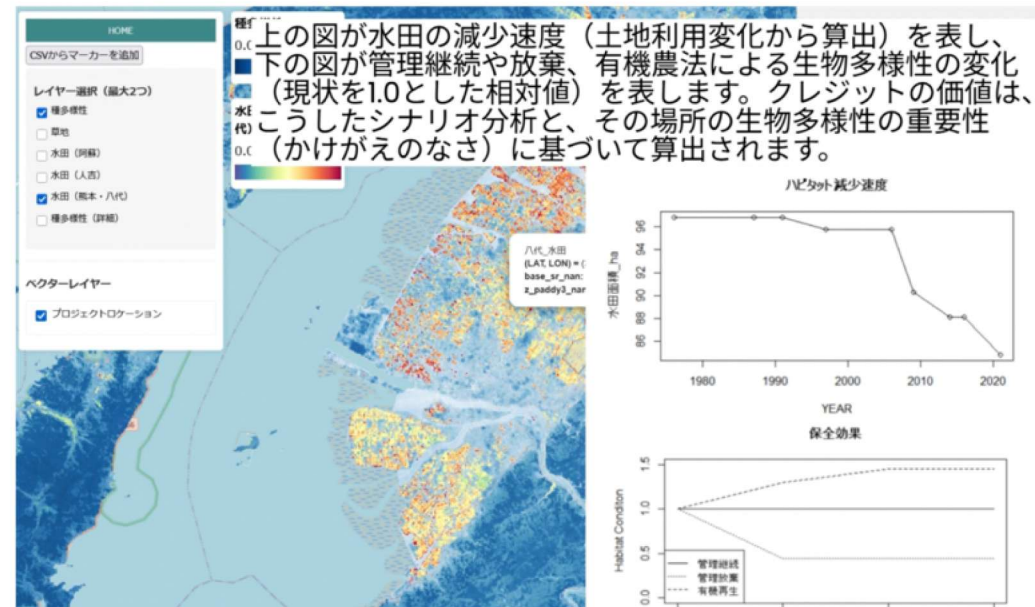
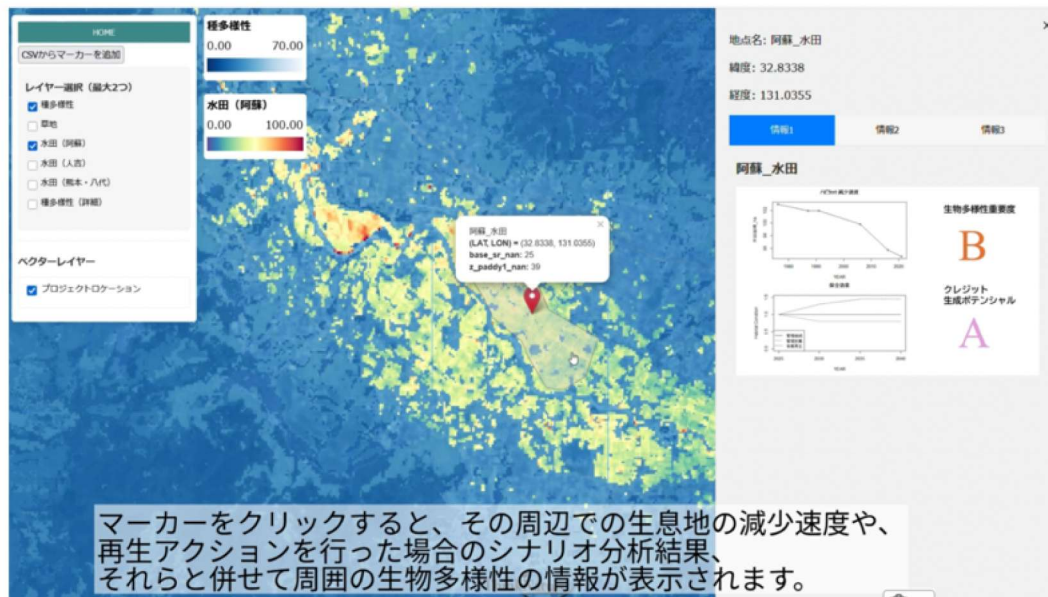
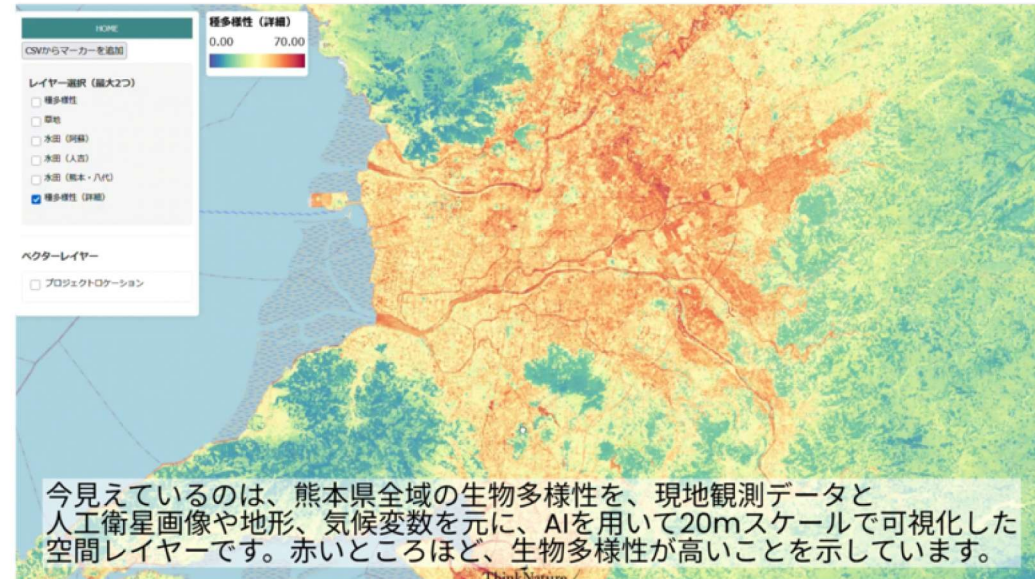
空間生態学、保全決定分析、生態学に基づく土地利用計画に30年間従事。生物多様性保全に関わる空間優先順位付け分析や多目的最適化分析のアルゴリズムを開発

**生物多様性クレジット・オフセット研究の第一人者**



2018年の欧州保全生物学会（ECCB: European Congress of Conservation Biology）で表彰

# 農林業に伴う生物多様性クレジット創出と算定の評価ツール



# 生物多様性ビッグデータとAIを駆使した ネイチャーの時空間分布の可視化

陸・海の生物関連の分布記録に環境データを紐付けて、機械学習のデータを整備します。

そして、AIモデルで種分布(生息適地)などを定量し、種分布を網羅的に重ねて、生物多様性の豊かさの空間的に可視化。

土地改変や気候変動に対応した種分布の変化も予測でき、シナリオ分析が可能です。

生物分布モデリングから、生物多様性の時空間分布の可視化まで

各種文献からデータ整備



オープンデータベース



種	場所	時間

種分布モデリング  
stack SDM (SSDM)



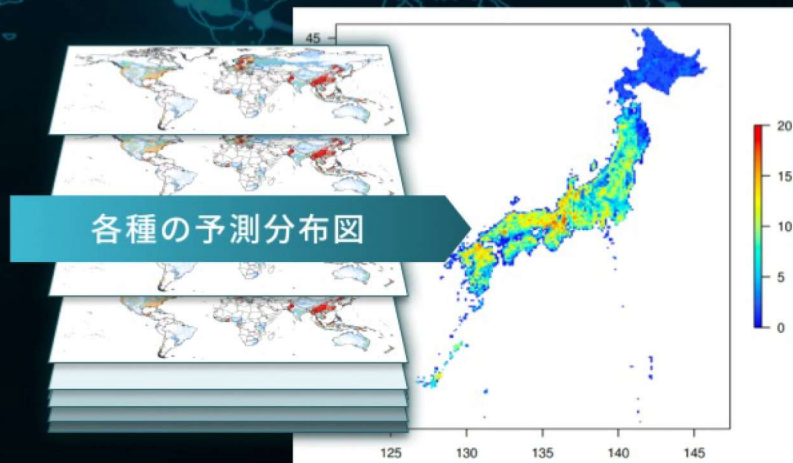
出現記録  
Occurrence records



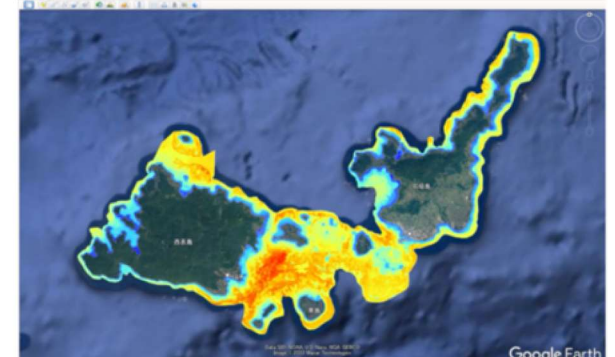
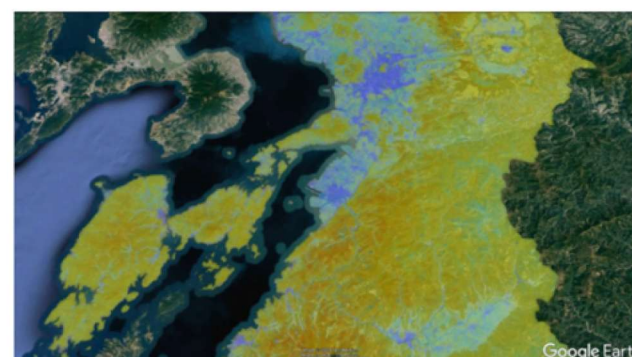
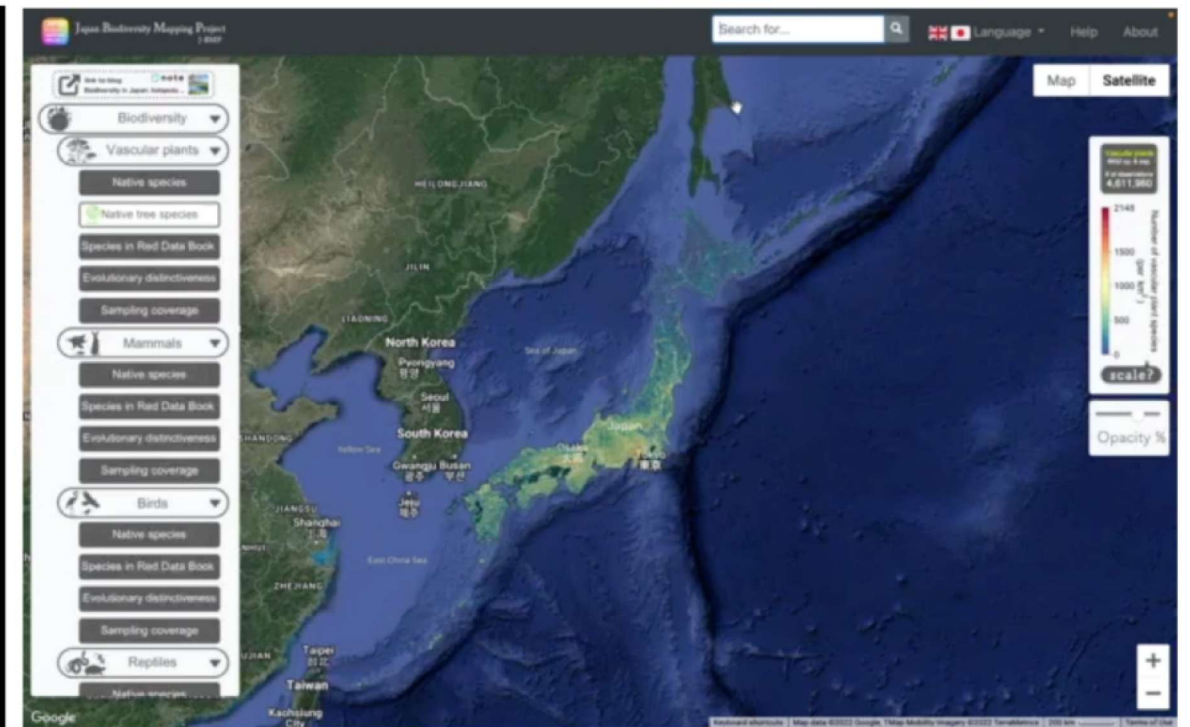
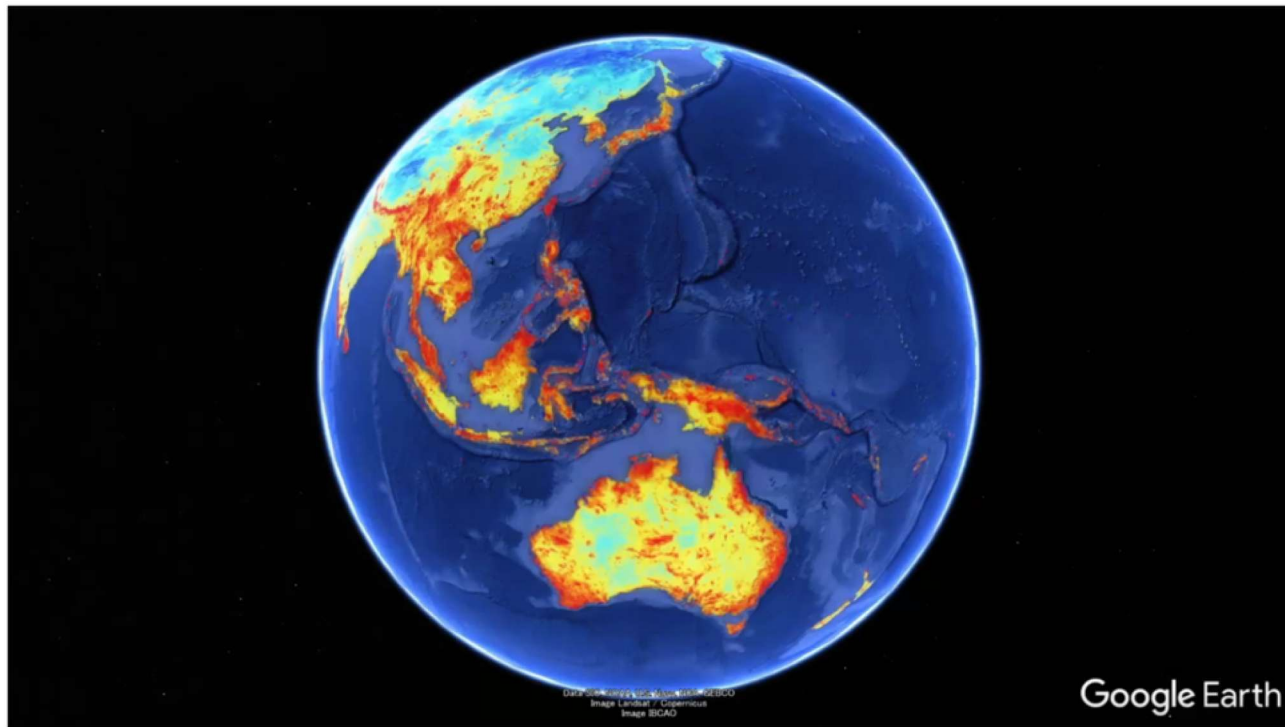
環境データ  
Environmental data

種分布モデリング  
SDM (Maxent)

全種の予測分布図を重ね合わせ  
種数分布を地図化



# 世界・国・地域の陸と海の自然を可視化するデータテクノロジー



空間解像度：20mスケールで生物種分布を予測  
時間解像度：3か月単位で更新が可能

# 気候変動に適応したネイチャーフレンドリーな生産・調達 アパレルビジネスへの提案

## カシミア生産・調達の持続性を担保する草原放牧の管理戦略

Contents lists available at ScienceDirect  
**Global Ecology and Conservation**  
 journal homepage: [www.elsevier.com/locate/gecco](http://www.elsevier.com/locate/gecco)

Original research article

**A pathway to biodiversity-friendly, sustainable cashmere production under climate change**

Yasuhiro Kubota<sup>a,b,1,\*</sup>, Takayuki Shiono<sup>a,b</sup>, Kenji Watanabe<sup>a,b</sup>, Buntarou Kusumoto<sup>b,c</sup>, Shogo Ikari<sup>a,b</sup>

<sup>a</sup> Faculty of Science, University of the Ryukyus, Okinawa 903-0213, Japan  
<sup>b</sup> Think Nature Inc., Okinawa 901-2102, Japan  
<sup>c</sup> Faculty of Agriculture, Kyushu University, Kasuga Research Forest, Fukuoka 811-2415, Japan

---

**ARTICLE INFO**

**Keywords:**  
 Climate change  
 Grassland conversion  
 Species distribution model  
 Spatial prioritization  
 TCFD  
 TNFD  
 Zonation

**ABSTRACT**

Nature-related risks of cashmere production in the Eurasian continent was evaluated by spatial dynamics of grassland biomass and biodiversity; especially in Inner Mongolia, the analyses combining satellite remote sensing of vegetation and stacked species distribution modeling revealed that priority areas of biodiversity conservation and suitable areas for cashmere goat herding shifted dramatically during 2000–2022. A grazing scenario ensuring minor reduction in grassland biomass and plant species richness could be implemented under the condition of less than 10 goats per hectare in the grasslands with more than 400 mm annual precipitation. In conclusion, suitable grazing areas and goat density for biodiversity-friendly, sustainable production should be determined adaptively according to the dynamics of grassland biomass and species richness, which was governed by shifting biome from cold deserts to grasslands, grassland to shrub lands, and/or shrub lands to grasslands, in response to climate change involving high rainfall and drought.

---

**1. Introduction**

Anthropogenic land modification on the planet affects the extinction risk of one million wildlife species (IPBES, 2019), causing unprecedented rapid biodiversity loss (Tollefson, 2019). Biodiversity conservation is therefore a key component of the Convention on Biological Diversity (CBD) underpinned by strategic targets of the recently adopted Kunming-Montreal Global Biodiversity Framework (GBF) that promoting protection, restoration and sustainable use (Milner-Gulland et al., 2021), and effective action is urgently required to achieve visions of the 2030 “Nature Positive” and 2050 “Living in Harmony with Nature” (Nicholson et al., 2021). Furthermore, our society and the economy are structured on the basis of the biosphere (Keith et al., 2022): biodiversity is directly linked to sustainable development (Dasgupta, 2021; Paul et al., 2020). In fact, biodiversity-based natural capital provides a range of commodities, and those international trades support the livelihoods of people around the world (Lenzen et al., 2012). Supply chains from commodity production to its consumption have geographically disproportionate environmental impacts across regions, accelerating region-specific degradation of biodiversity and ecosystem services through telecoupled supply chains (Carmena et al., 2023; Liu et al., 2013). Therefore, there is a need to develop feasible action plans that balance biodiversity conservation with the sustainable

---

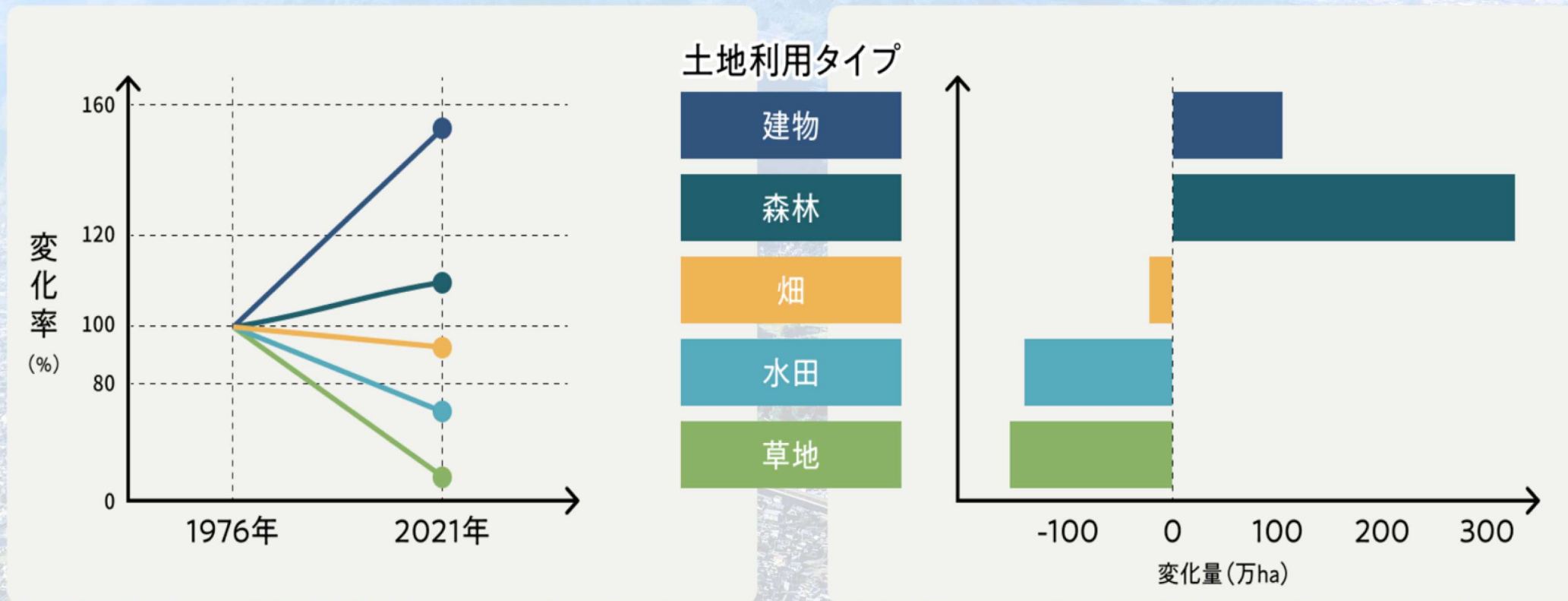
<sup>\*</sup> Correspondence to: Faculty of Science, University of the Ryukyus, Nishihara, Okinawa 811-2415, Japan.  
 E-mail address: [kubota.yasuhiro@gmail.com](mailto:kubota.yasuhiro@gmail.com) (Y. Kubota).  
<sup>1</sup> Kubota et al. A pathway to biodiversity-friendly, sustainable cashmere production under climate change



論文は、こちらからご覧頂けます

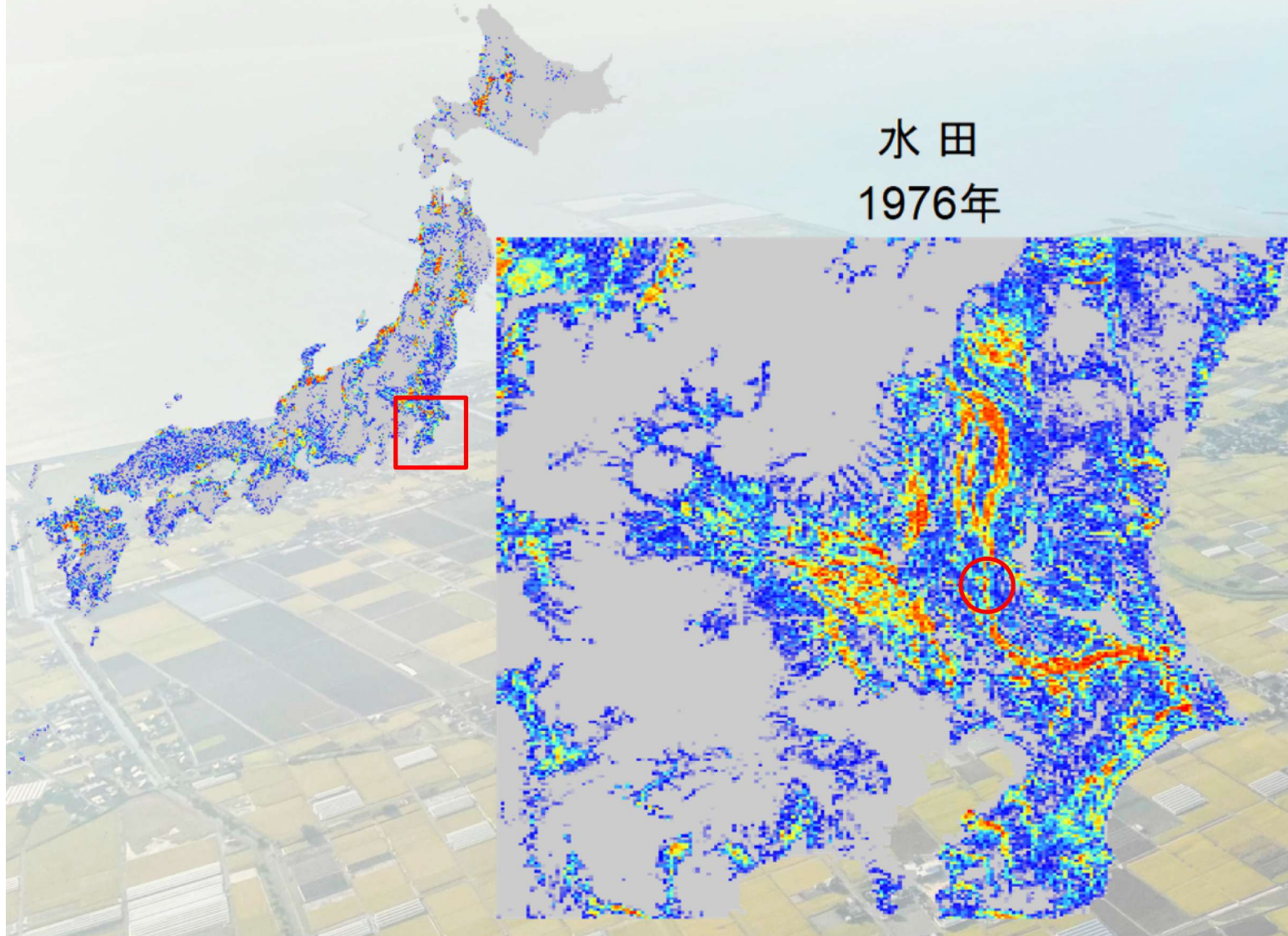
<https://doi.org/10.1016/j.gecco.2026.e04069>

# 日本の土地利用の変化：水田や草地在急激に消失



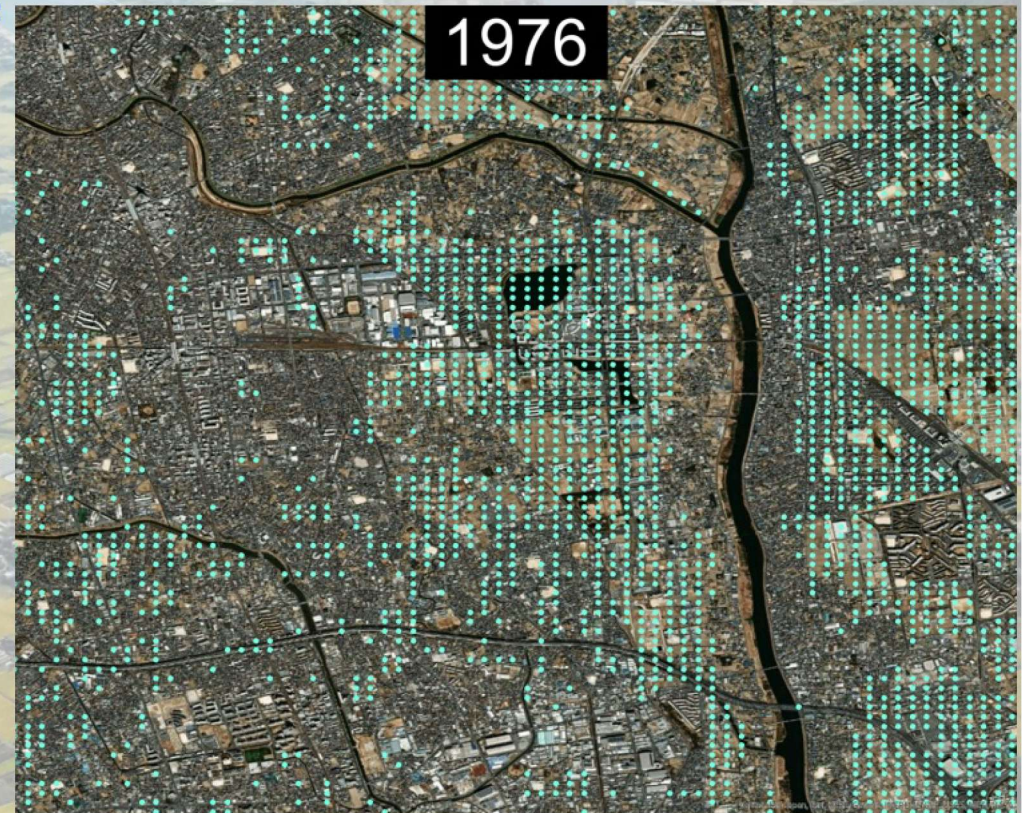
# “消えていく水田”の歴史を可視化

1976年



## 水田消失の地域的な事例

埼玉県越谷市（越谷レイクタウン周辺）の水田分布推移  
背景の衛星画像は2023年時点で青い点が水田を示している



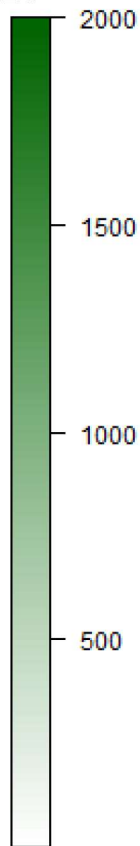
# 日本の半自然草原は急速に消失

100年以上  
継続管理されている  
半自然草原の35%が  
熊本県に分布

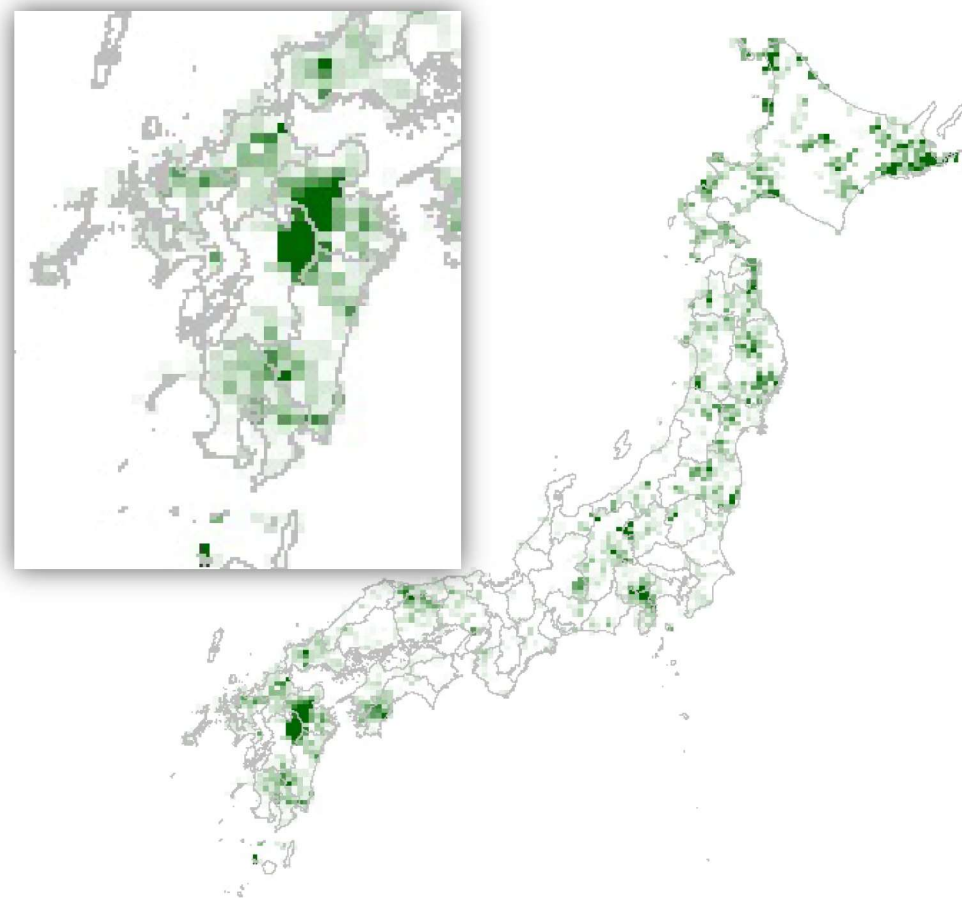
※熊本県の面積は日本の陸域の1.96%

しかし毎年約2%ずつ  
消失している

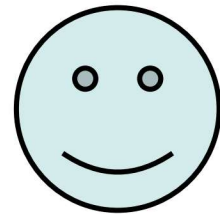
2次メッシュ  
(約100km<sup>2</sup>)  
あたり ha



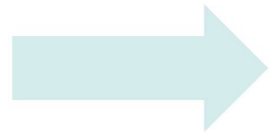
半自然草原の面積推移  
1900年



# 農地など半自然生態系の成り立ちとその価値



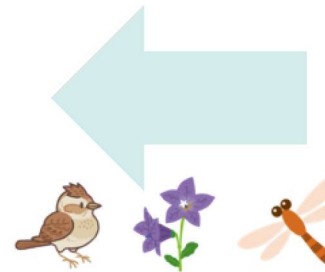
資源利用のための  
周期的な介入



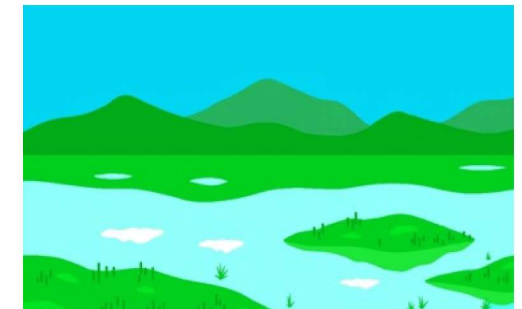
資源や生態系機能



攪乱の多い環境に依  
存した種が集積



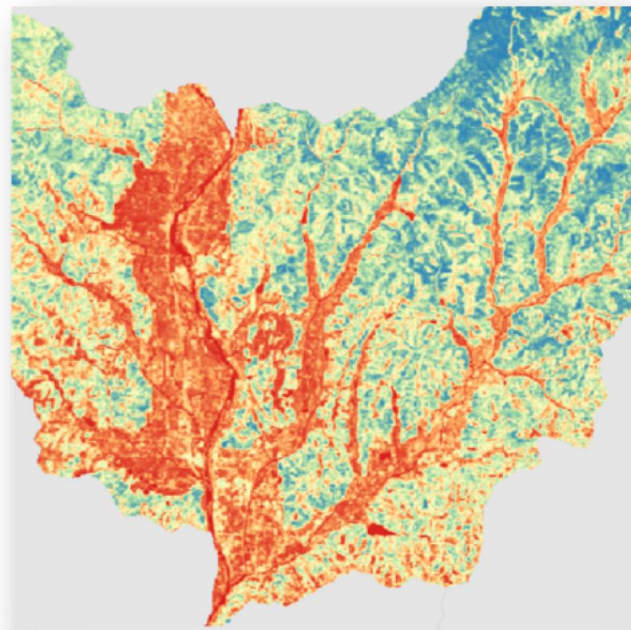
様々な原生的自然環境



生息地の空間的な  
バリエーションが高いため、  
多くの種が高密度で生息

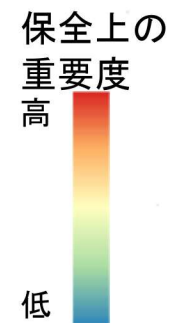
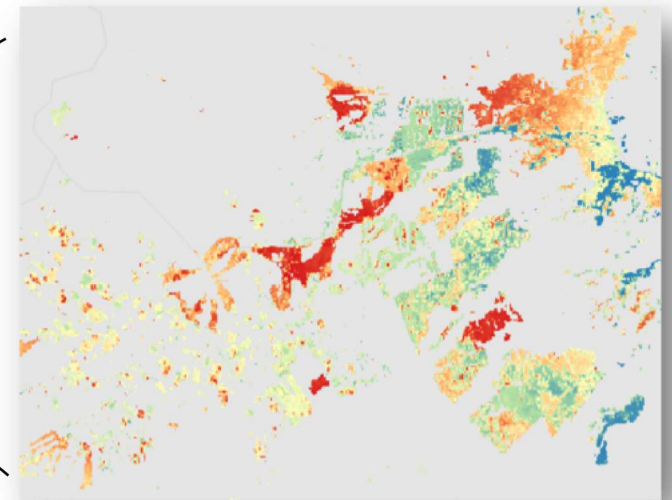
# 半自然生態系の生物多様性の可視化

保全上重要な草原（自然＋半自然）と水田の全国分布



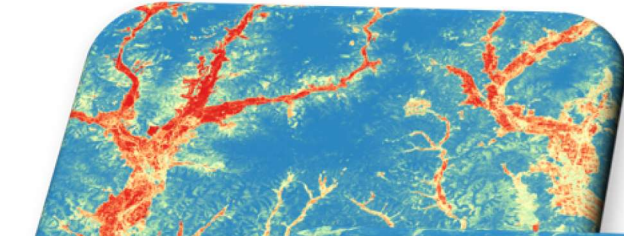
兵庫県市川町の棚田エリア

長野県上田市の半自然草原

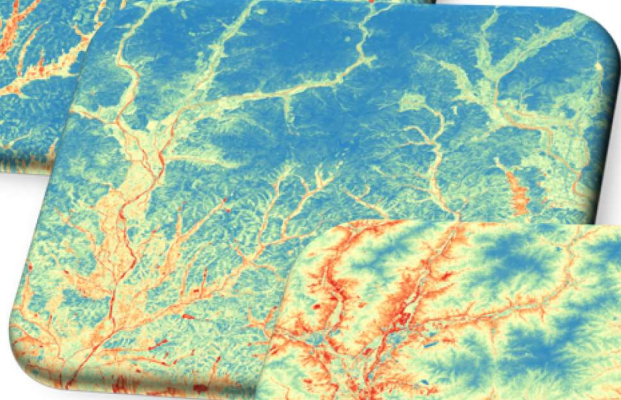


# 水田の生物多样性保全上の価値

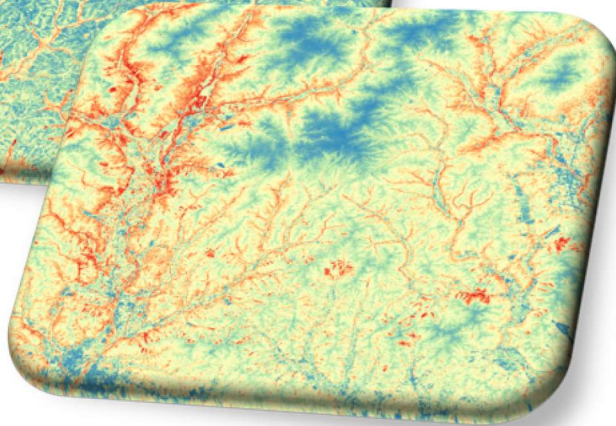
ヌマガエル



ホソミイトトンボ



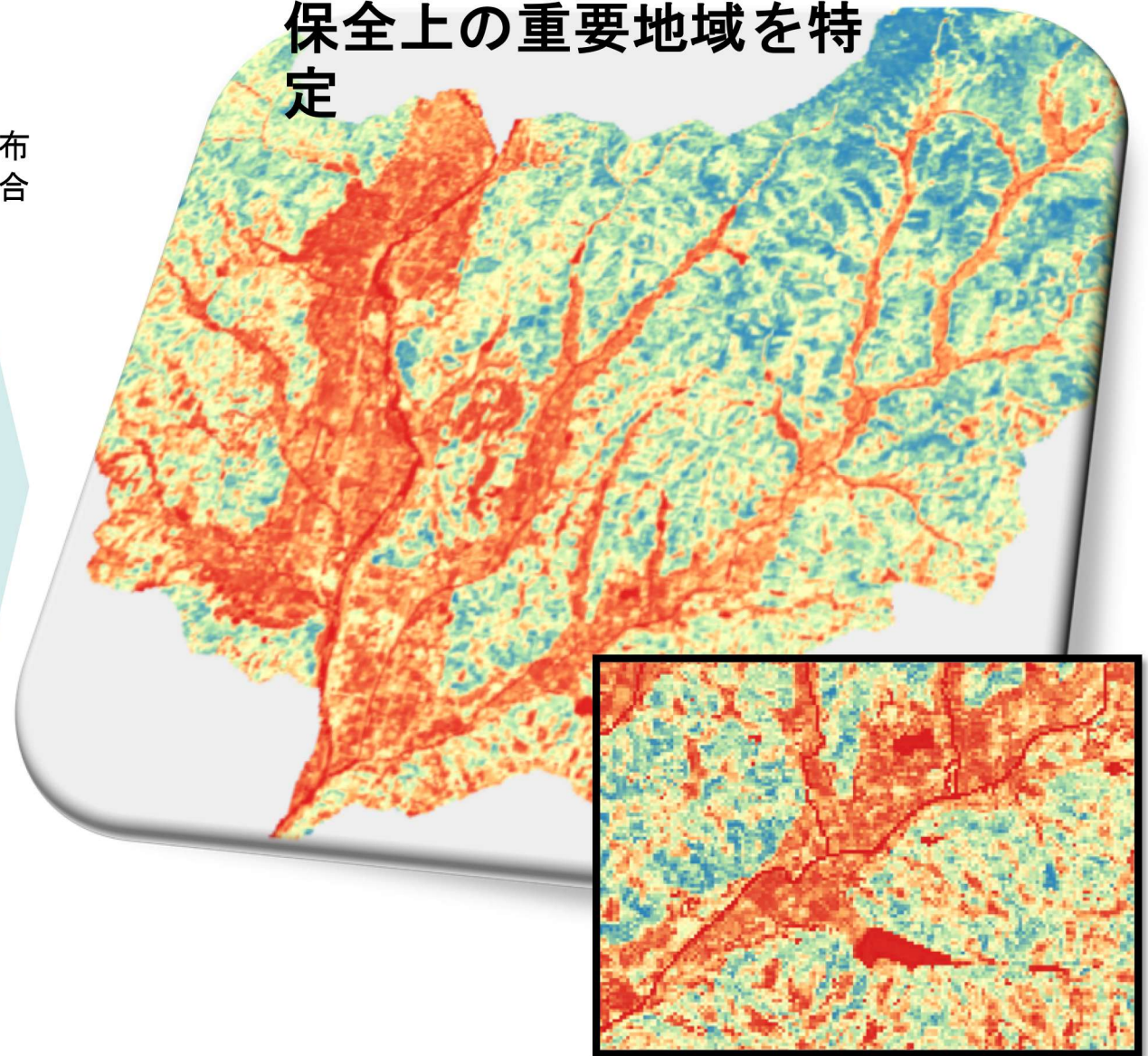
イノコヅチ



大量の分布  
情報を統合

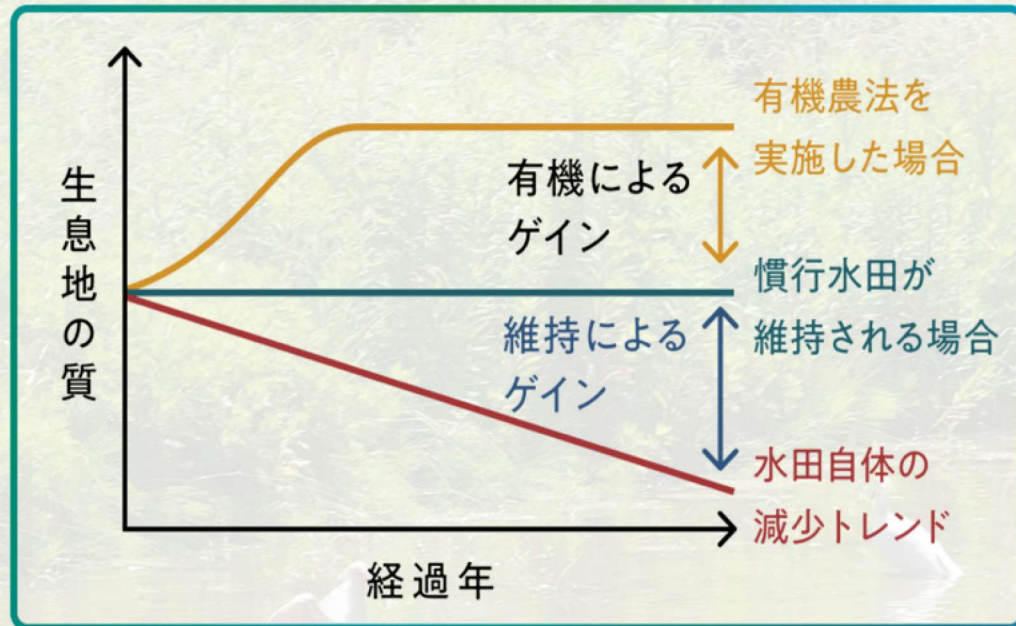


保全上の重要地域を特定



## 水田ハビタットの質・量の評価

# 水田保持・RO農法の生物多様性影響の評価軸

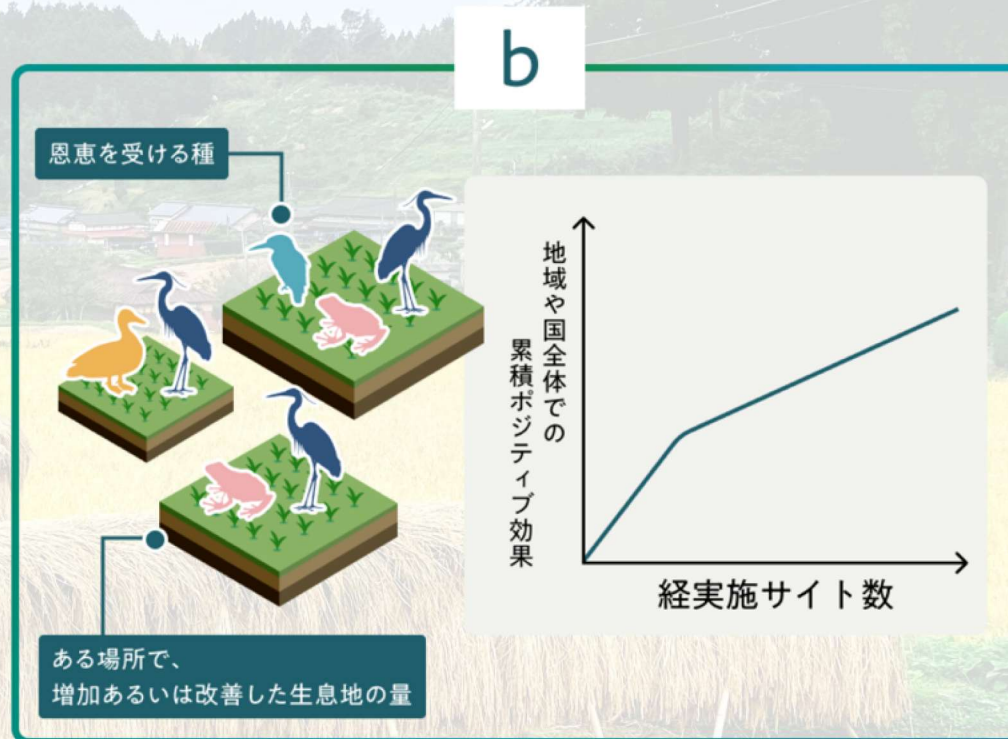
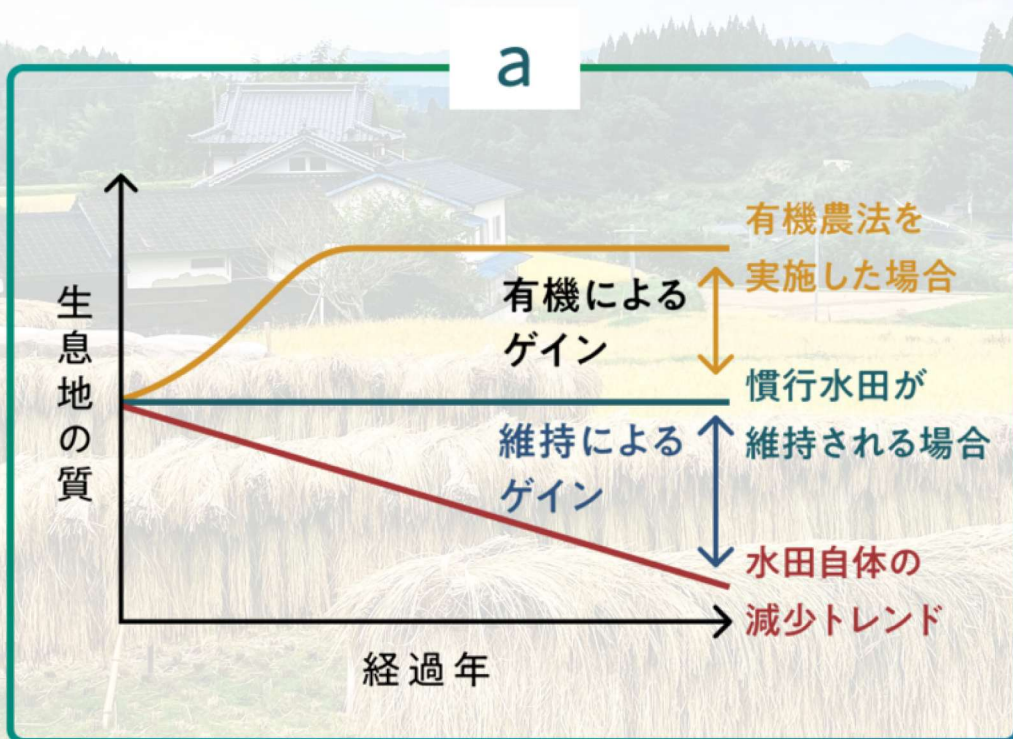


## 無農薬、減農薬、湛水期間の効果評価

- 「無農薬・無化学肥料」と「農薬あり・化学肥料あり」の比較
- 「無農薬」と「農薬あり」をそれぞれ比較
- 「減農薬」「農薬以外の害虫管理を併用」の記載に着目し、減農薬の効果を定量
- 「冬期湛水」について一定のデータ数が得られたため、比較定量

分類群	分類カテゴリ
農薬	農薬あり
	無農薬
	減農薬
化学肥料	化学肥料あり
	無化学肥料
冬期湛水	冬干し
	冬期湛水
夏季中干し	中干し
	中干延期
	中干し無し

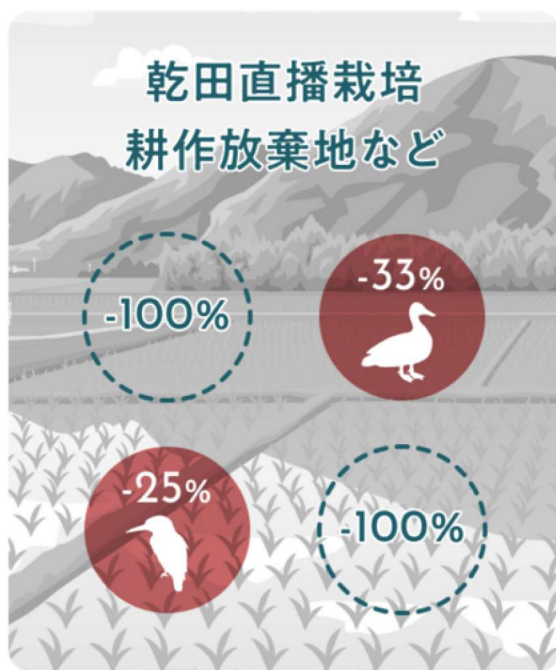
# 水田保持・RO農法アクション評価の階層的枠組み



自然配慮アクションの評価を行う際、ある場所でどのくらいの貢献を行ったかという評価軸（アルファ多様性レベルの観点）と、それらが複数の場所で実施されることにより、種や生息地への恩恵がどのように蓄積するかという評価軸（ガンマ多様性レベルの観点）の両方を持つことで、アクションの評価と実施戦略を統合した議論が可能になる。

# 水田保持・RO農法に伴う 生物多様性インパクト評価の考え方

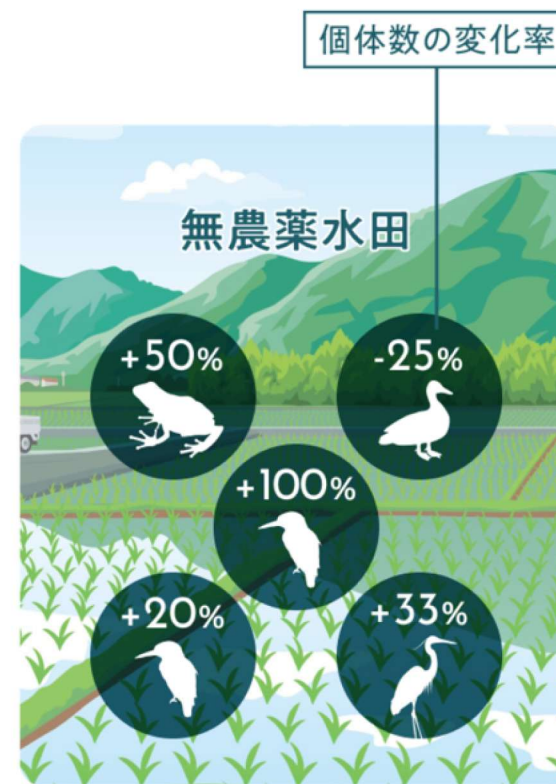
## Mean Species Abundance (MSA)



変化率の平均 **-65%**



**±0**



変化率の平均 **+46%**

← 生物多様性を減らす効果

→ 生物多様性を増やす効果

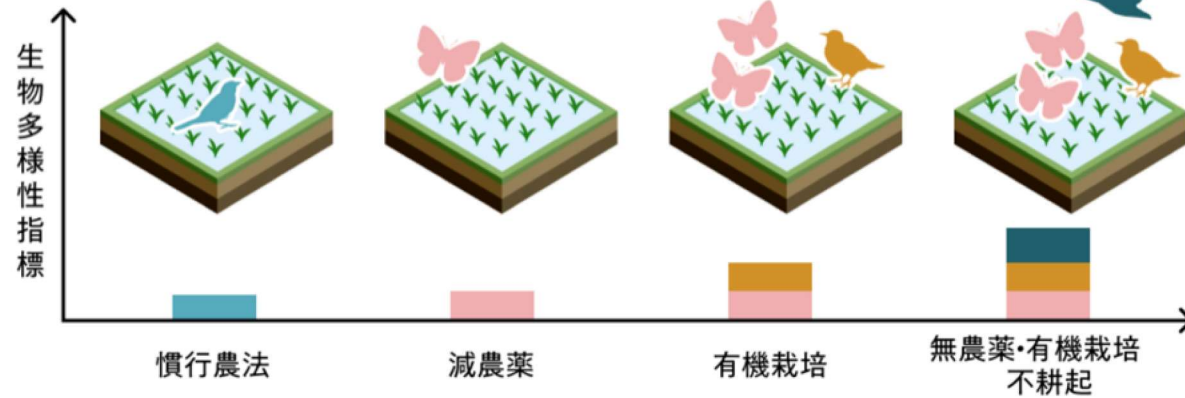
# 生物多様性インパクト評価のデータと計算方法

## 農法タイプが生物多様性に与える影響の評価

水田における有機農法など、  
農法に依存した生物多様性の  
再生効果の可視化

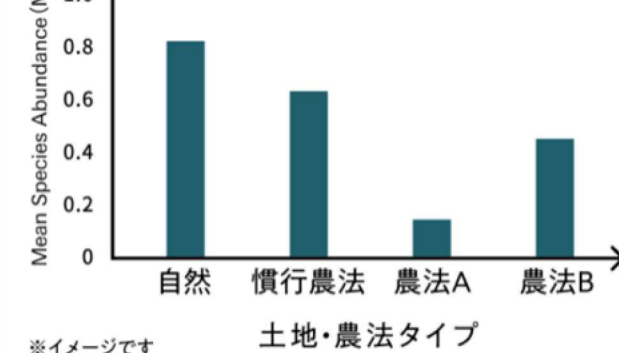


### 慣行農法 VS 有機農法 生物多様性インパクト比較



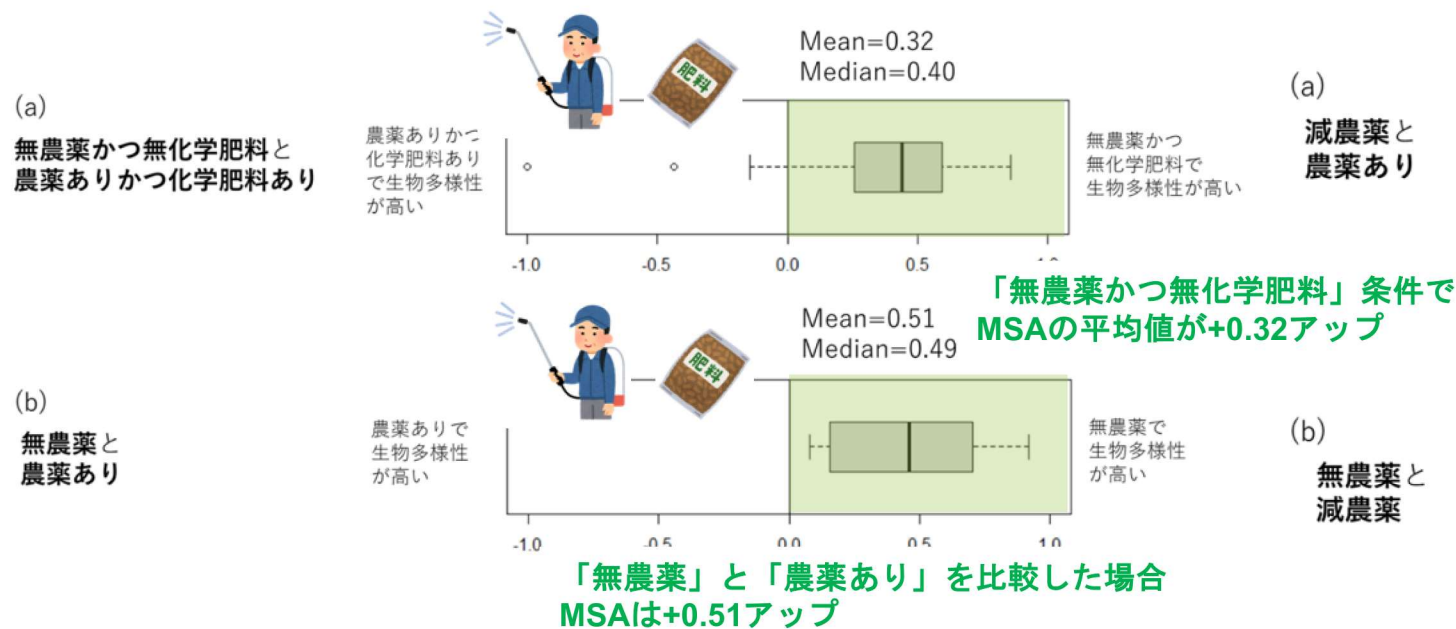
マクロ生態学的メタ解析

### MSAによる定量評価

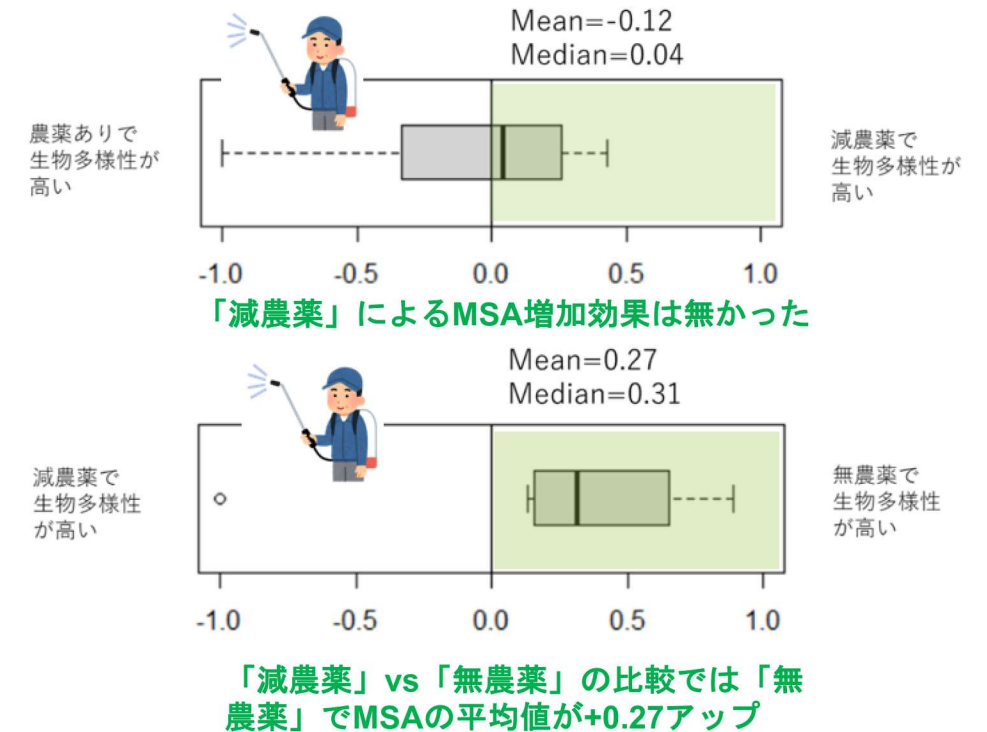


# MSA指標による評価結果 農薬・化学肥料の有無による生物多様性への影響

## 「農薬・化学肥料」 vs 「無農薬・無化学肥料」



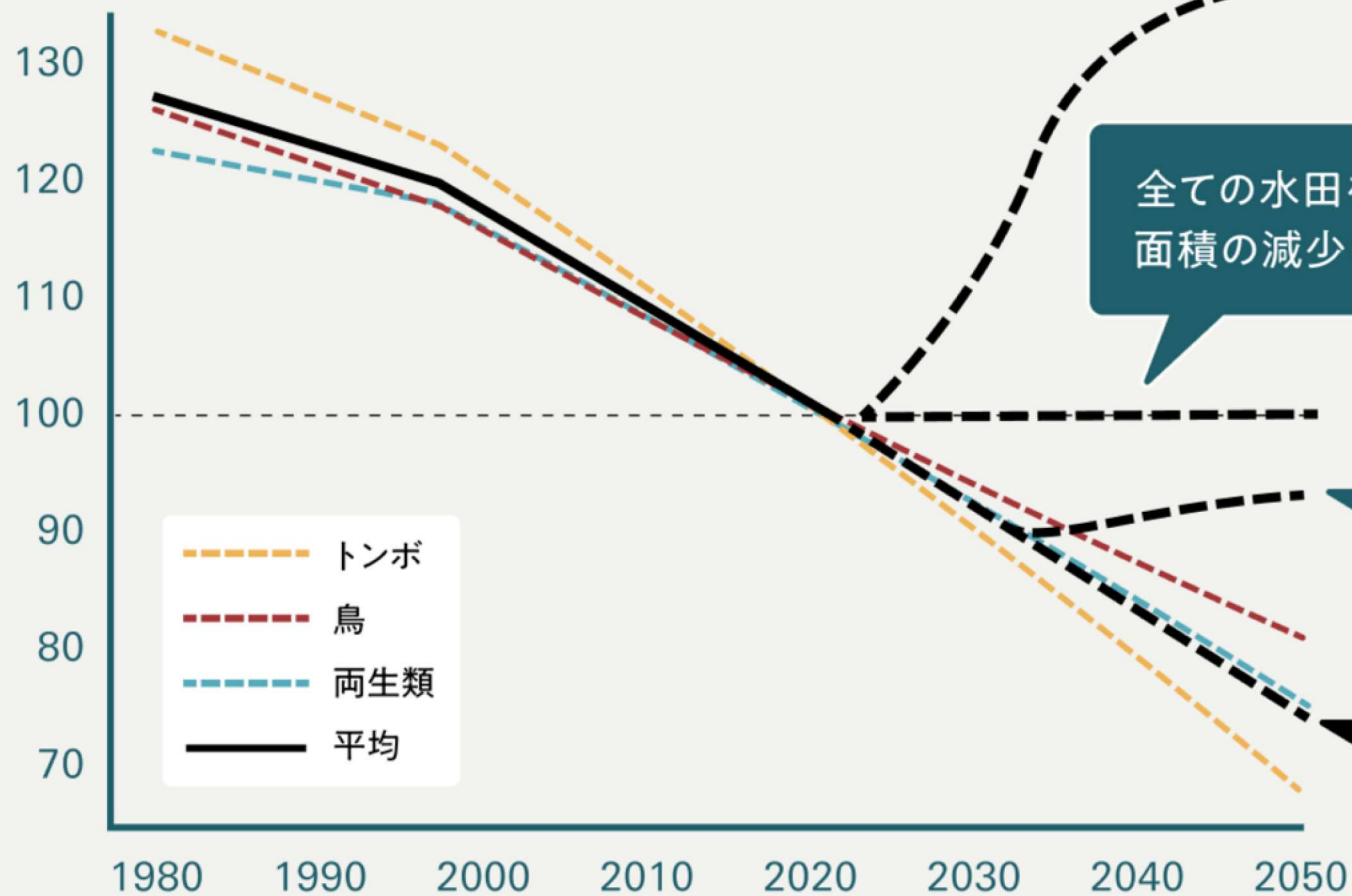
## 「農薬あり」 vs 「減農薬」 vs 「無農薬」



これらの結果は「無農薬かつ無化学肥料」あるいは「無農薬」栽培を実施すると慣行農法の比較して、生物多様性が個体数ベースで30~50%増加することを示唆

# 水田保持とRO農法推進によるインパクトの定量予測

2021年に対する  
生息地割合(%)



全ての水田で有機農法を行えば、過去50年近くの水田減少を相殺しうる効果

全ての水田を維持すれば面積の減少は下げ止まる

残った水田で有機農法を拡大すれば減少トレンドを抑えられる

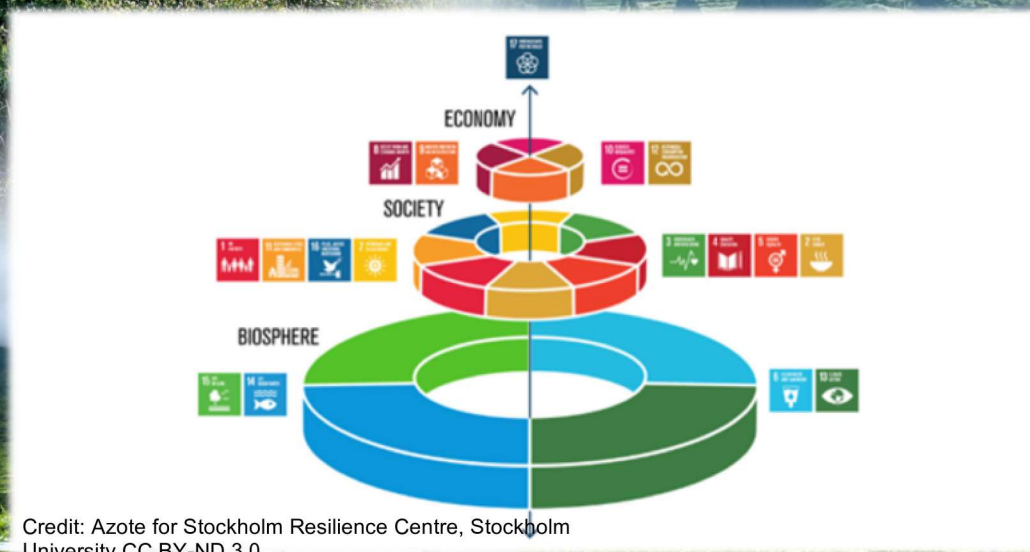
水田が減り続けると水田に住む生き物の生息地はさらに減っていく

※全生息域のうち1/3以上が水田である種を対象に算出

# 取り組み事例

## 農業（農耕地・草原）ランドスケープが支える自然資本

経済的な恩恵：農産物、畜産、炭素貯留、景観（観光資源）



生物多様性=自然資本

# 半自然環境は絶滅危惧種が多い

生息環境ごとの絶滅危惧状況：

1997-2025年の環境省レッドリストと面積変化から

Extinction risk status by habitat type:

Insights from Japan's Red Lists (1997–2025) and changes in habitat area

・ 草原面積は1970年から  
2021年にかけて半減

・ 面積当たりの絶滅危惧  
種数は森林の10倍以上

冨高まほろ<sup>1\*</sup>・五十里翔吾<sup>2,3</sup>・關岳陽<sup>1,4</sup>・井上太貴<sup>1,5</sup>・河合純<sup>1</sup>・山本裕加<sup>1,6</sup>・宮本和<sup>1</sup>・芳澤あやか<sup>1,7</sup>・金子冬美<sup>1</sup>・久保田康裕<sup>2,3</sup>・田中健太<sup>1</sup>

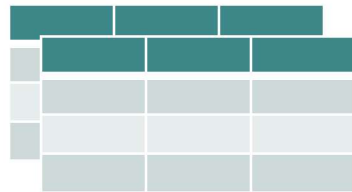
Mahoro Tomitaka<sup>1\*</sup>, Shogo Ikari<sup>2,3</sup>, Takeharu Seki<sup>1,4</sup>, Taiki Inoue<sup>5</sup>, Jun Kawai<sup>1</sup>, Yuka Yamamoto<sup>6</sup>, Nodoka Miyamoto<sup>1</sup>, Ayaka Yoshizawa<sup>7</sup>, Fuyumi Kaneko<sup>1</sup>, Yasuhiro Kubota<sup>2,3</sup>, and Tanaka Kenta<sup>1</sup>

<sup>1</sup>筑波大学山岳科学センター菅平高原実験所、<sup>2</sup>琉球大学理学部、<sup>3</sup>株式会社シンク・ネイチャー、<sup>4</sup>住友林業株式会社、<sup>5</sup>サンリット・シードリングス株式会社、<sup>6</sup>日本エヌ・ユー・エス株式会社、<sup>7</sup>長野県植物研究会

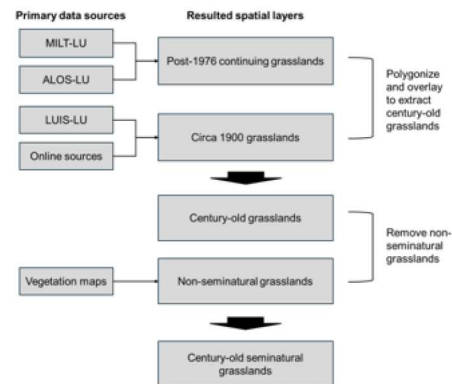
# 歴史の古い半自然草原（古草原）は草原性種が多様

日本中の植生プロットデータを収集し、草原性プロットの歴史を分類、古草原の種多様性を全国で検証

TNで収集した7万以上の植生プロットデータ

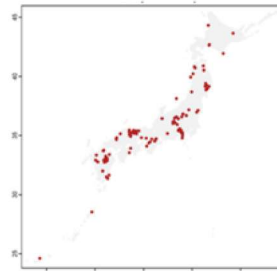


土地利用履歴

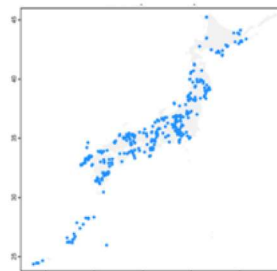


Ikari et al. 2026

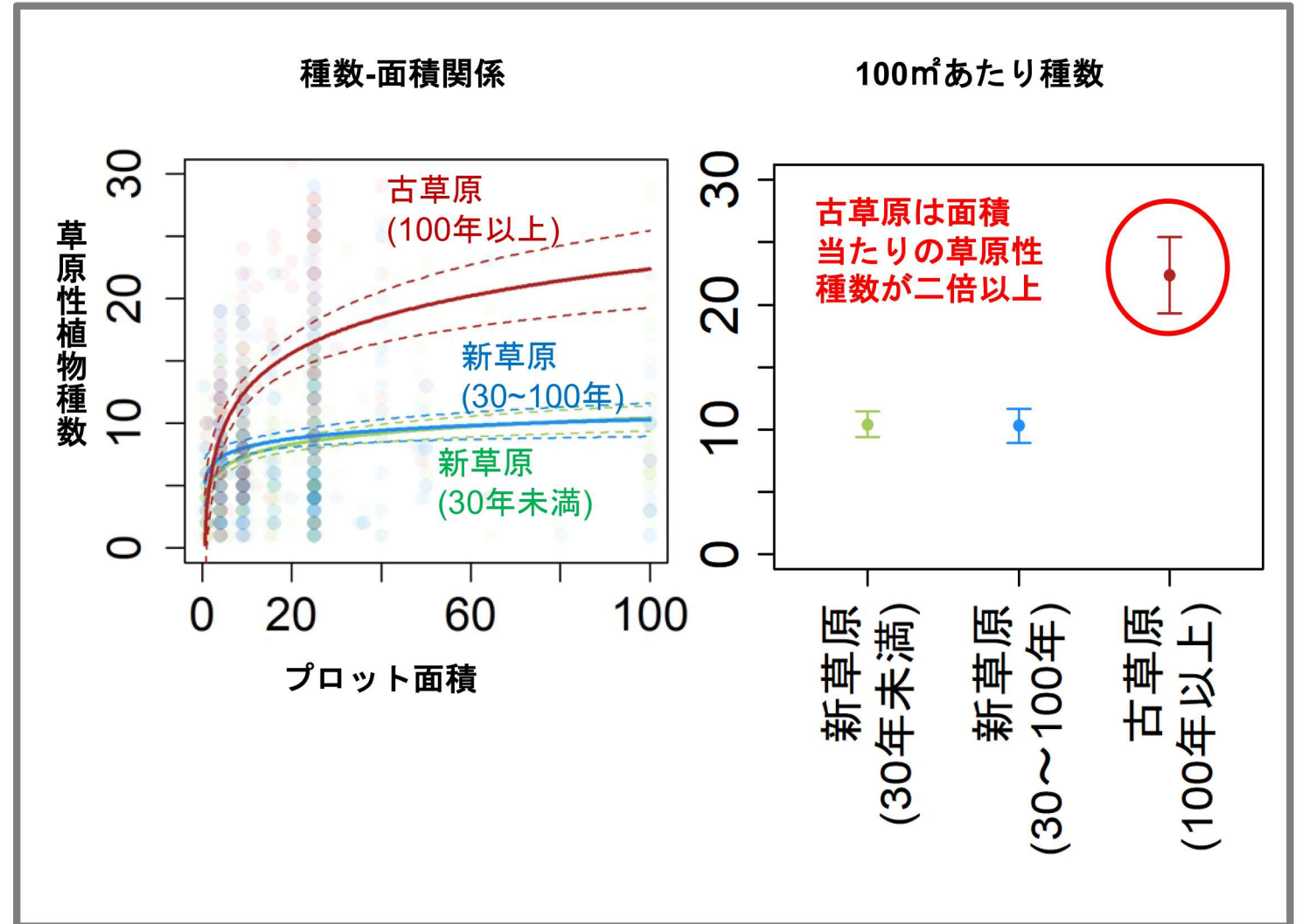
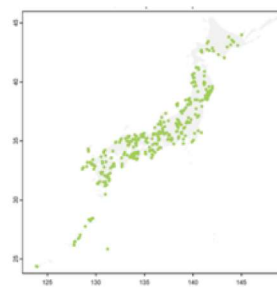
古草原(100年以上)  
N=172



新草原(30~100年)  
N=384

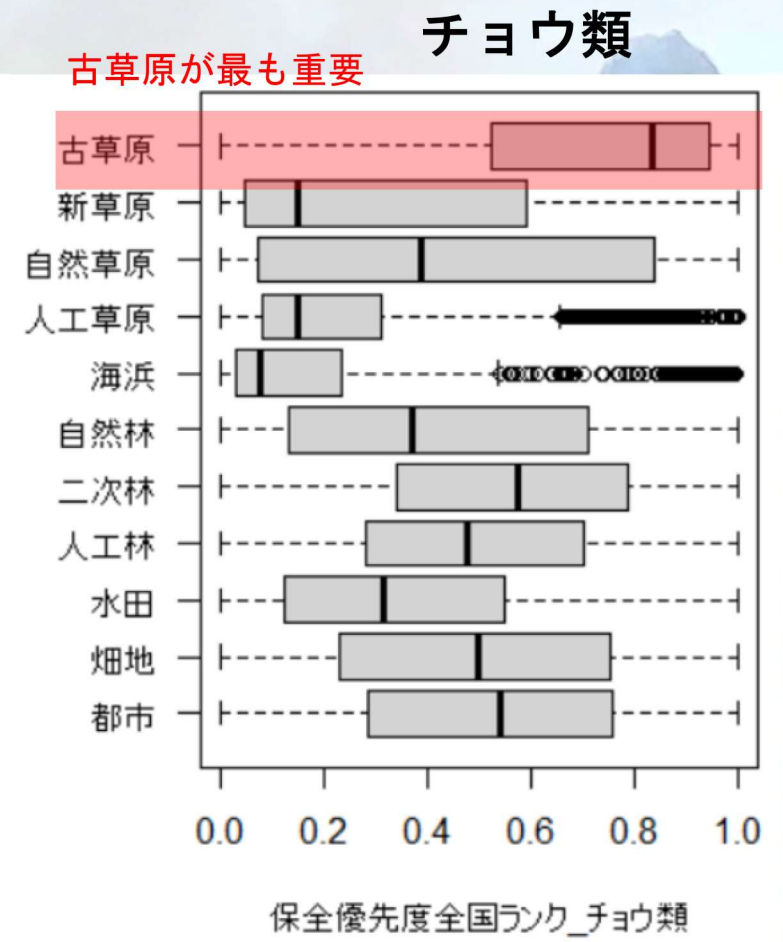
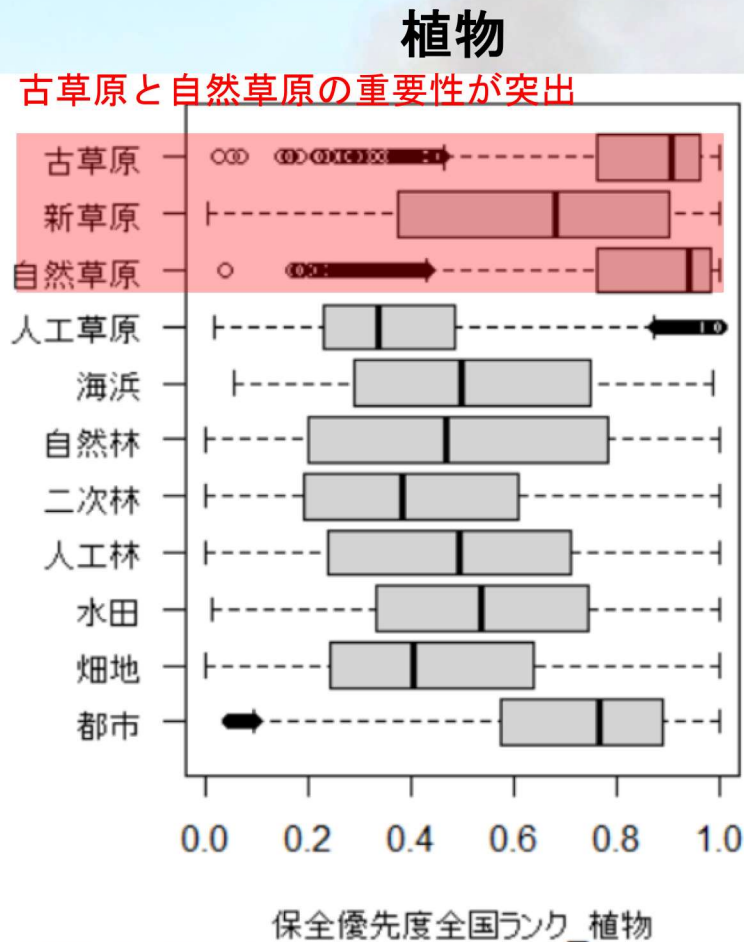
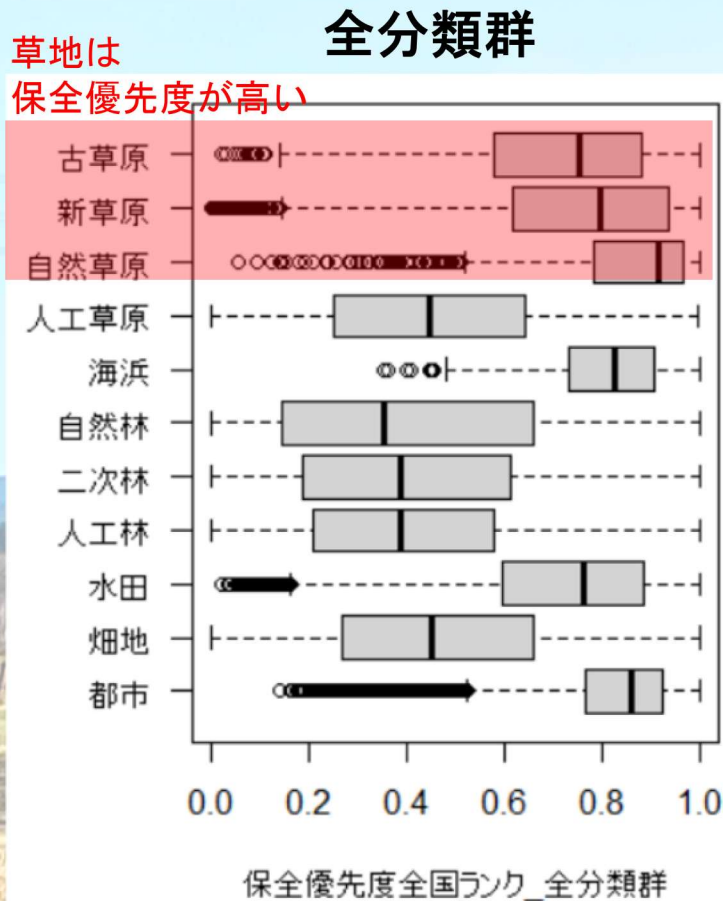


新草原(30年未満)  
N=438



# 日本の草原の保全優先度先度

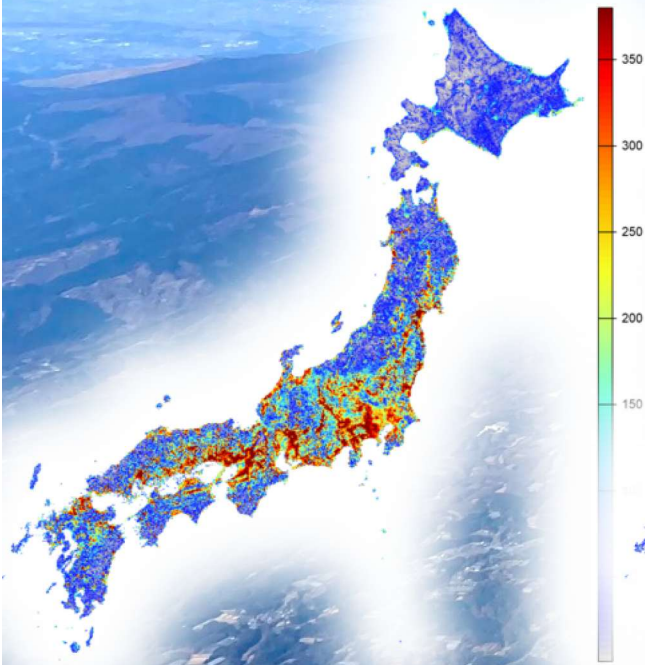
草地は日本スケールで特に保全上の優先度が高い土地タイプである。  
 また、植物やチョウといった草原性種を多く含む分類群では、**歴史の古い草原の重要度が特に高い**。  
 これは、**草原性種の多くが、分布域を失い希少化している**ため。



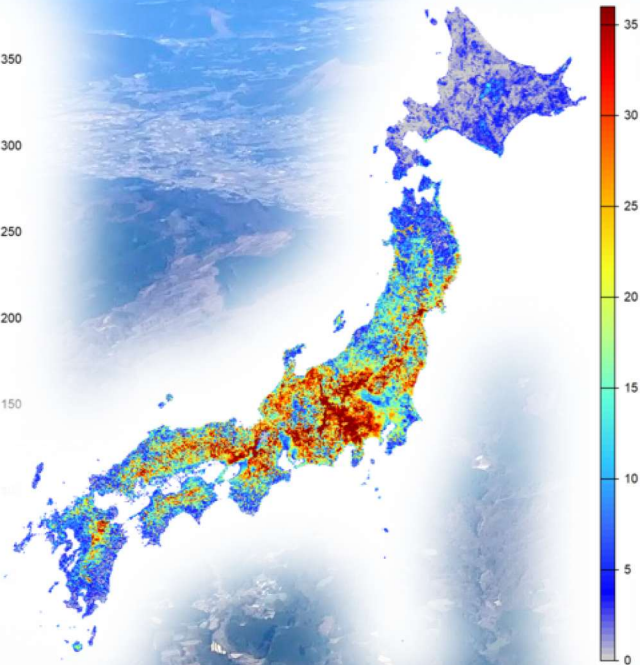
※古草原＝継続期間が100年以上である二次的草原。一般に「半自然草原」と称される草原に対応

# 草原消失で生息地を失う種のホットスポット

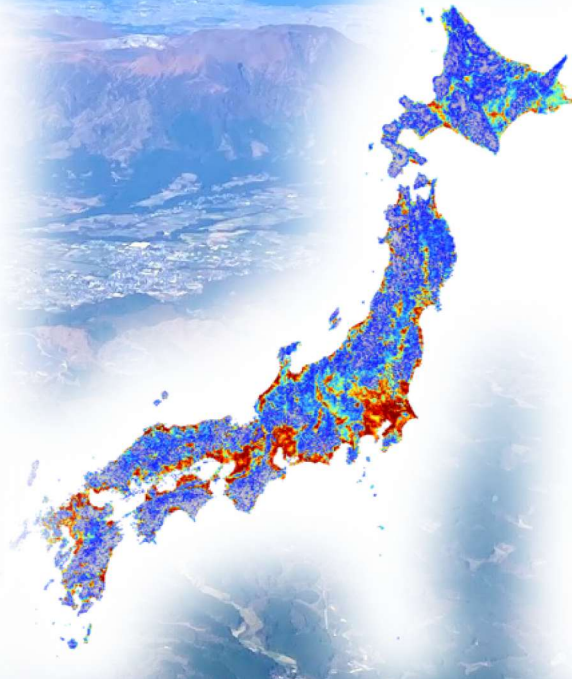
草原性植物種数



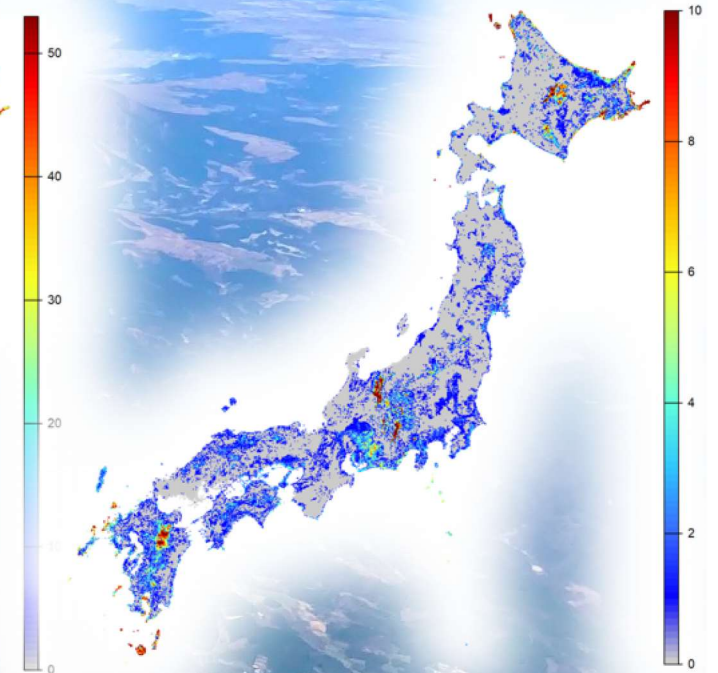
草原性固有植物種数



草原性動物種数



草原性境域分布植物種数

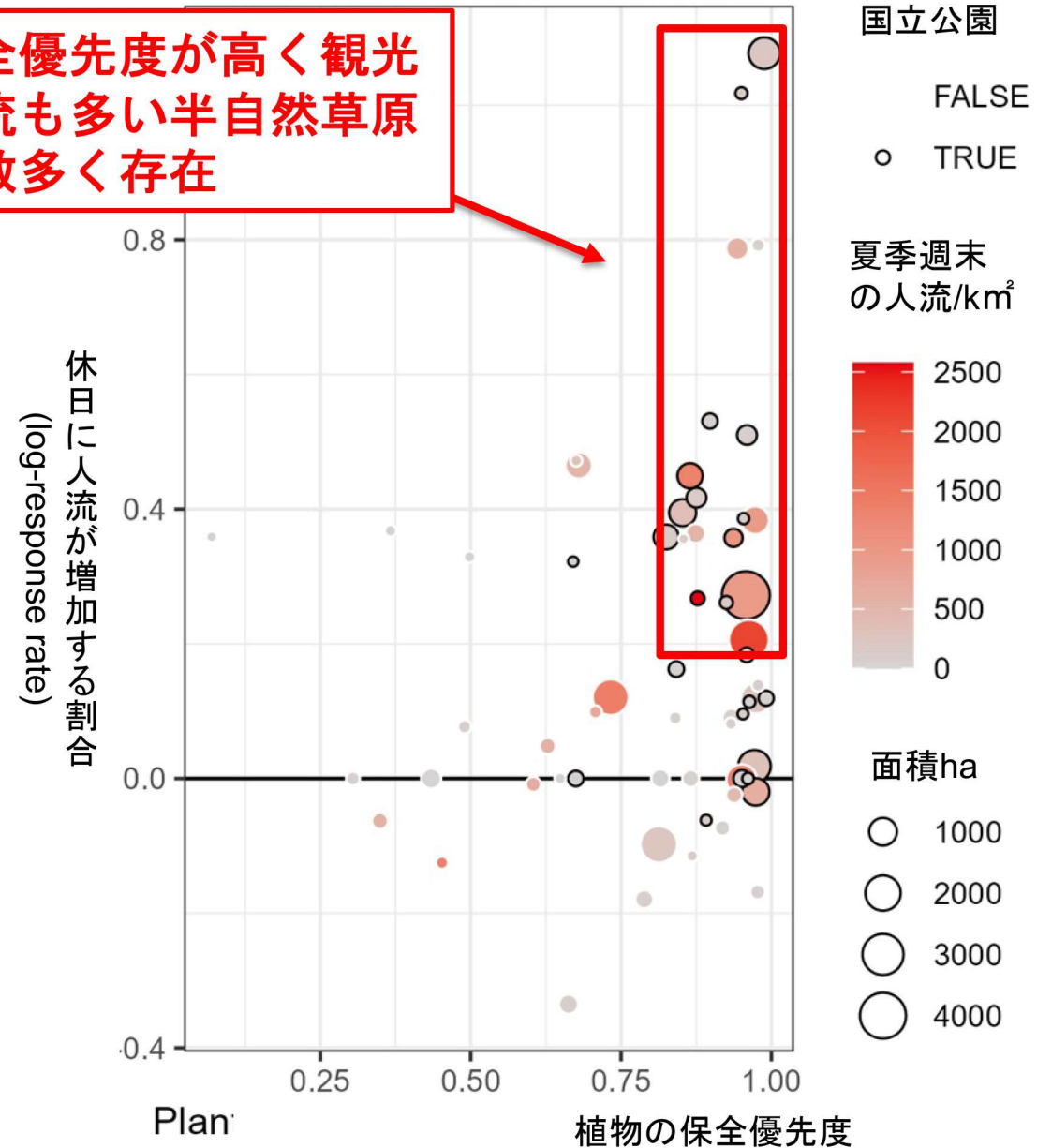


# 半自然草原の経済的恩恵：観光価値の定量化

## 草原は地域的な観光資源



保全優先度が高く観光  
人流も多い半自然草原  
が数多く存在



## 地域の農地で生物多様性情報を収集する意義

### 地域の自然誌データの充足

- 半自然生態系の分布データは不足
- 特に地域ごとの違いに関する情報は限られている
- 分布記録の蓄積により、棚田生態系の特殊性と重要性を科学的に評価可能に

### 管理手法による生物多様性応答の評価

- 無農薬や無化学肥料、除草剤不使用など、自然配慮型農法の効果に関する科学的エビデンスはいまだ不足
- 複数の管理手法がとられる農法で統一した評価を行うことがとりわけ有効

「こだわりの農法」のすばらしさを科学的に証明するために、  
比較調査も拡大する必要

# 個別農家向け生物多様性・生態系サービスの可視化プラットフォーム

現場での農法や取り組みが、どのように自然資本の回復（ネイチャーポジティブ）に繋がっているか数値化  
農業PR支援ツール&保全効果の定量化

都道府県を入力  
例)

農園名を入力  
例)

一文字入れるとサジェストされます

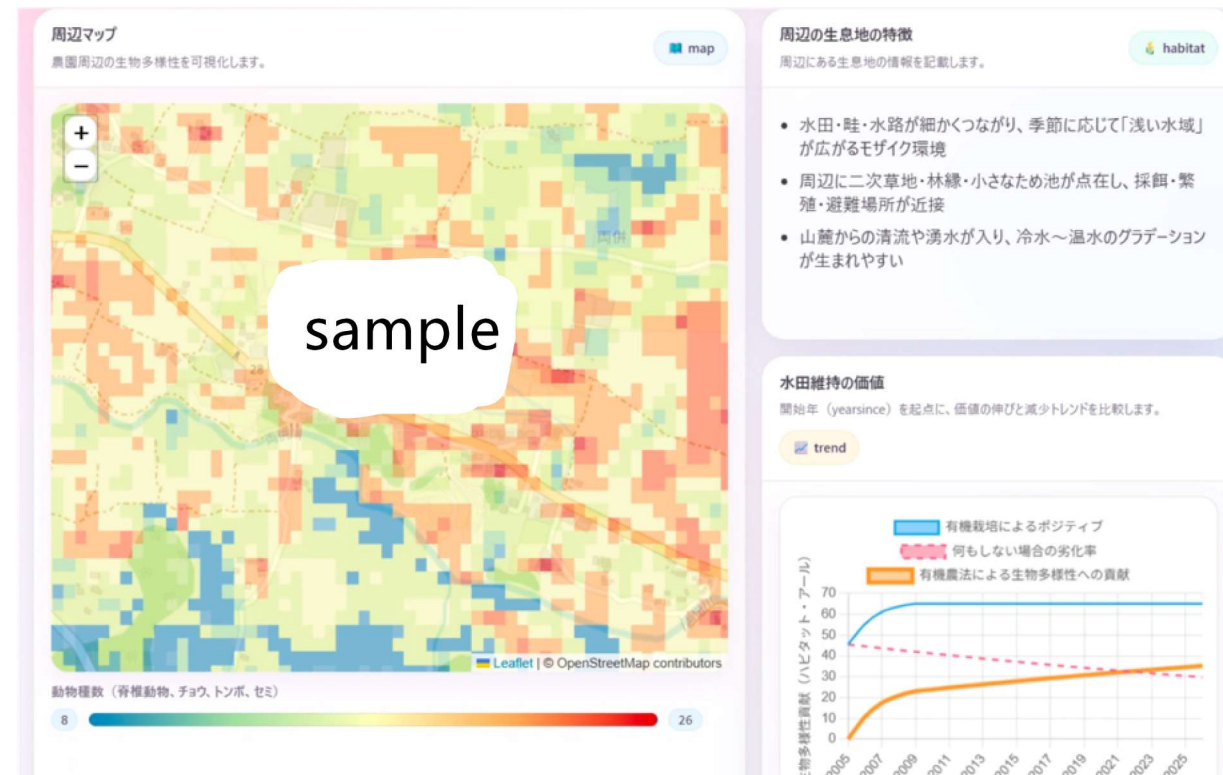
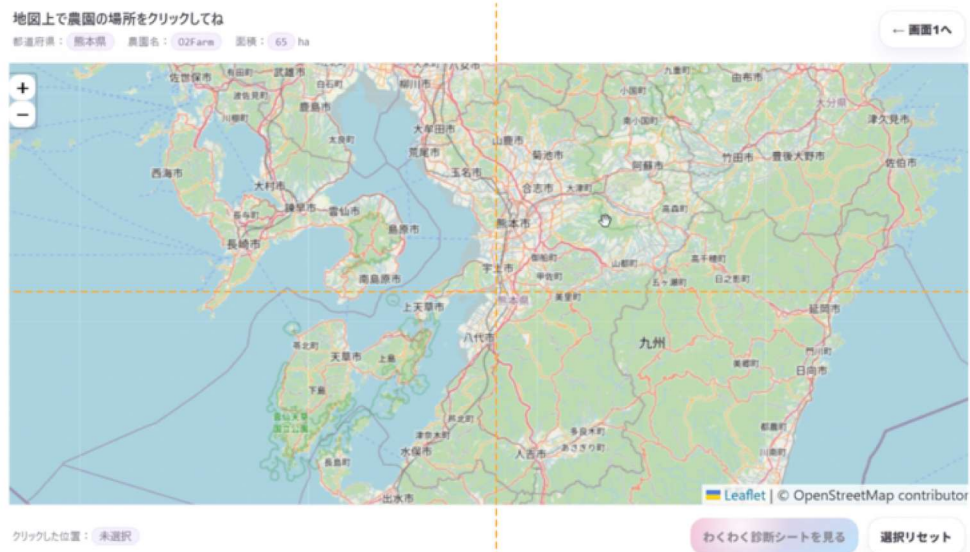
こだわりの栽培を始めた年

西暦4桁で入力してください

面積 (a)

小数OK (例: 0.5)

次に進む



小規模農家を束ねる「面的展開」プラットフォーム

個別の努力を「地域全体のインパクト」として合算し、投資対象としての規模（スケール）を狙う

## 地域社会の管理によって保持されている半自然生態系 (草地や農地など) が過小利用で急速に劣化

半自然の農業生態系のネイチャーポジティブ  
＝消失しつつある人-自然の相互作用を維持・回復し、  
私たちの生活の豊かさを守ること

そのためには、

- 農業生態系を維持することによる事業や行政上のメリットの定義
- そうした恩恵を受けやすい場所の特定と管理の優先付け
- 農地の自然資本の価値に基づく管理継続の財務価値化
- 開発による影響の回避とその評価

といった、空間的な情報に基づく事業機会の定式化が不可欠

都市と自然、  
近いからこそおもしろい。



# 北九州市 ネイチャーポジティブ 経営シンポジウム

北九州市と企業の挑戦!〜北九州市ネイチャーポジティブネットワーク、始動。〜

会場: JR九州ステーションホテル小倉

主催: 北九州市 共催: (公財)地球環境戦略研究機関

2025  
**11.14**  
FRIDAY  
14:00-16:30

いま、企業経営に求められている「ネイチャーポジティブ」とは、失われつつある生物多様性に歯止めをかけ、回復を目指す新たな考えです。このシンポジウムでは、「経営」の視点から生物多様性の価値を見つめ直し、自然のしくみや恵みを活かしたこれからの経済のあり方や、持続可能なビジネス・地域づくりへのつなげ方を、企業・研究機関・北九州市の実践を通じて探ります。

**基調講演**

**「生物多様性の“かけがえのなさ度”と北九州市の挑戦」**

久保田 康裕 ㈱シンク・ネイチャー 代表取締役 CEO

**話題提供**

**「ネイチャー・ファイナンスの最前線」**

金井 司  
三井住友信託銀行㈱ フェロー役員

**「日本企業のネイチャー・ポジティブへの取り組みの最新動向」**

高橋 康夫  
(公財)地球環境戦略研究機関  
生物多様性と生態系サービスユニット副ディレクター

**パネルディスカッション**

「北九州市内企業・団体が語る、私たちのネイチャーポジティブへの取り組み方」

自然と触れ合える  
いろいろな施設の  
紹介もあるよ!

参加申し込み

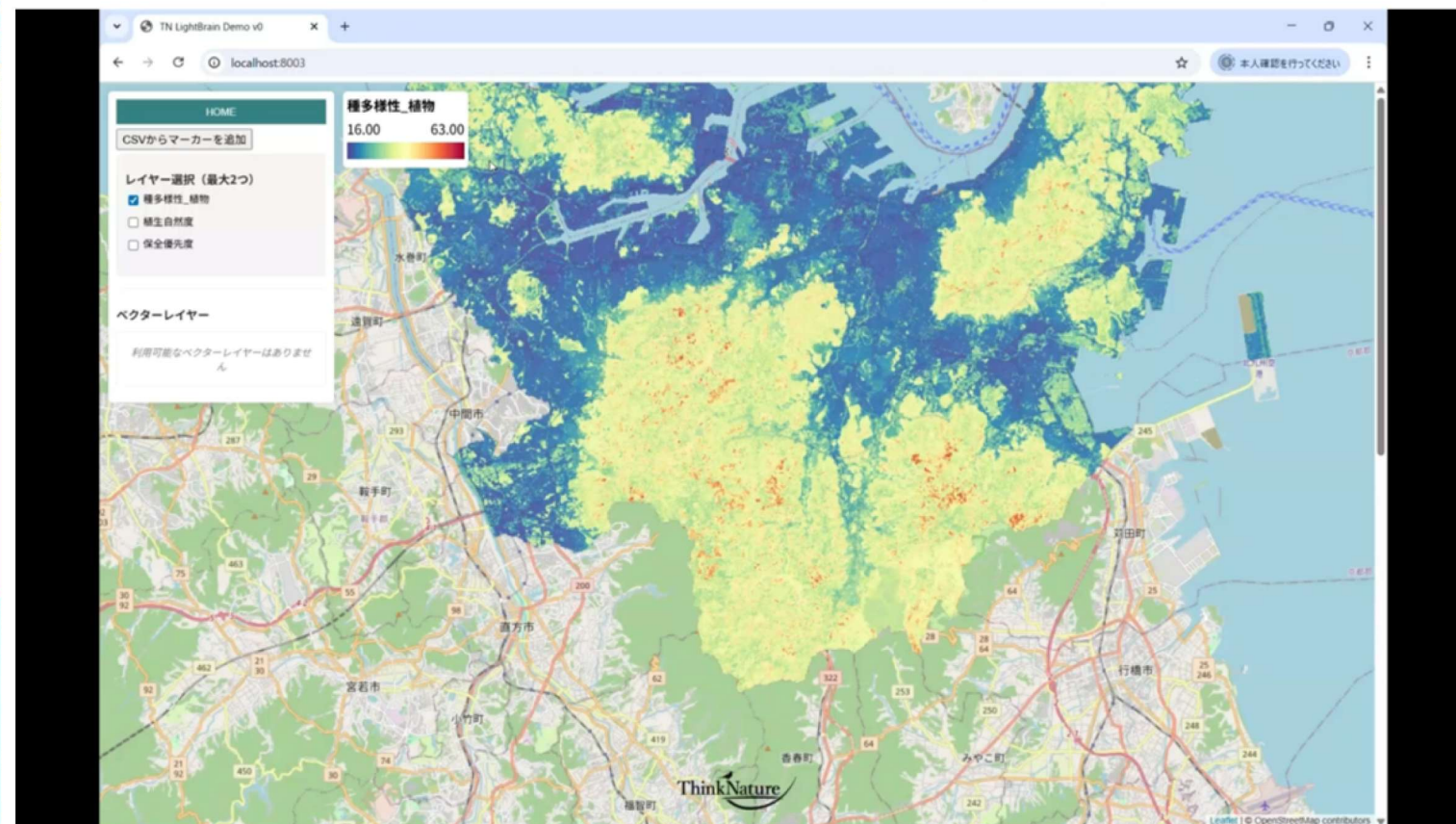
会場参加 定員 150 名  
オンライン配信 1,000 名

申し込み締切 **11/13** (木)  
<https://www.iges.or.jp/jp/events/20251114>

問い合わせ先: 北九州市ネイチャーポジティブセンター事務局  
(公益財団法人 地球環境戦略研究機関 北九州アーバンセンター)  
E-mail: [kitakyushu-info@iges.or.jp](mailto:kitakyushu-info@iges.or.jp) | TEL: 093-681-1563

写真: 平尾台 (C)City of Kitakyushu

# 北九州市の生物多様性・自然資本 見える化システム



# 北九州市の生物多様性

## “かけがえのなさ度”<sup>香月・黒川</sup>保全優先度・高解像度マップ

植物、哺乳類、鳥類、爬虫類、両生類、  
チョウ類、トンボ類の種分布データを統合して計算

皿倉山

響灘緑地(グリーンパーク)

若松北海岸

赤色の場所ほど  
土地開発された場合に生物絶滅リスクが高く  
生物多様性損失が相対的に大きくなる

また、赤色の場所ほど  
自然配慮した場合にネイチャーポジティブ効果が  
大きくなることを示す

北九州市響灘ビオトープ

Data SIO, NOAA, U.S. Navy, NGA, GEBCO  
Image © 2025 Airbus

Google Earth

## スケーラブルな草地保全へ：再エネの可能性

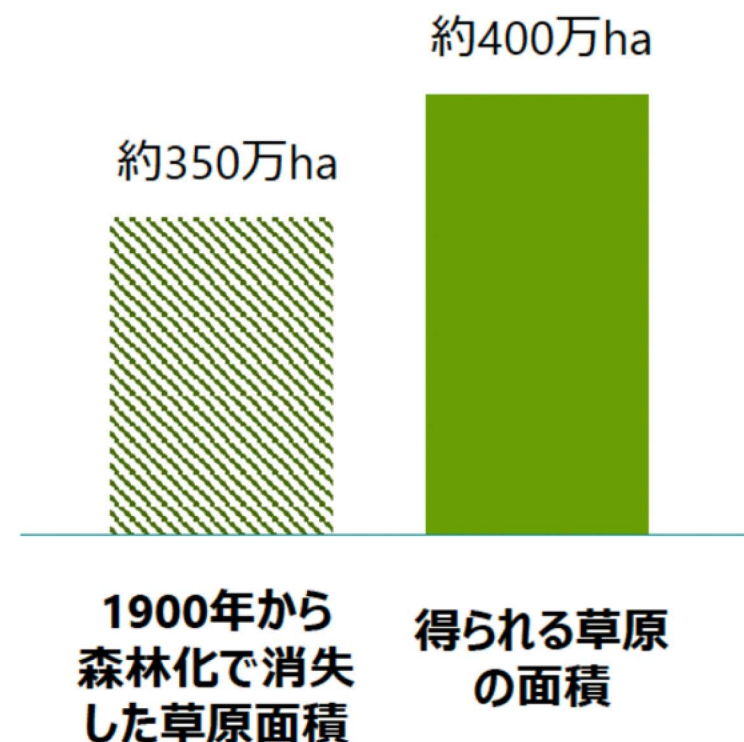
2050年の電力需要予測およそ1000TWhをすべて再生可能エネルギーで発電した場合、日本における面積・年間当たりの平均正味発電量 $0.025\text{TWh}/\text{km}^2/\text{year}^*$ を用いると、太陽光パネルおよび風力発電施設の総面積は400万ha程度となる。ここで、例えば再エネ施設と同程度の草地を周辺に維持するした場合、1900年と同水準の草地面積が復元されることになる。



山間部に再エネ設備



周囲に草地を維持



Magazines ネイチャーポジティブセミナー抄録

# 生物多様性クレジットとオフセット：なぜ失敗するのか、そして成功させるための設計

#アセスメント #気候変動 #生物多様性 #自然資本 #論文紹介



執筆者：NPJ編集部 2025.12.04

論説は、こちらから  
ご覧頂けます

<https://np-journal.jp/articles/biodiversity-offset-credit-lecture/>

Think Nature

Nordic Council of Ministers  
**Planning biodiversity offsets**  
Global Ecology and Conservation 54 (2024) e03039

Biological Conservation 227 (2018) 112–120  
Contents lists available at ScienceDirect  
Biological Conservation  
journal homepage: [www.elsevier.com/locate/biocon](http://www.elsevier.com/locate/biocon)

Perspective  
Fifteen operationally important decisions in the planning of biodiversity offsets  
Atte Moilanen<sup>a,b,\*</sup>, Janne S. Kotiaho<sup>c,d</sup>

Conservation Biology  
Essay | Open Access | CC BY  
**Three ways to deliver a net positive impact with biodiversity offsets**  
Atte Moilanen<sup>a,b,\*</sup>, Janne S. Kotiaho

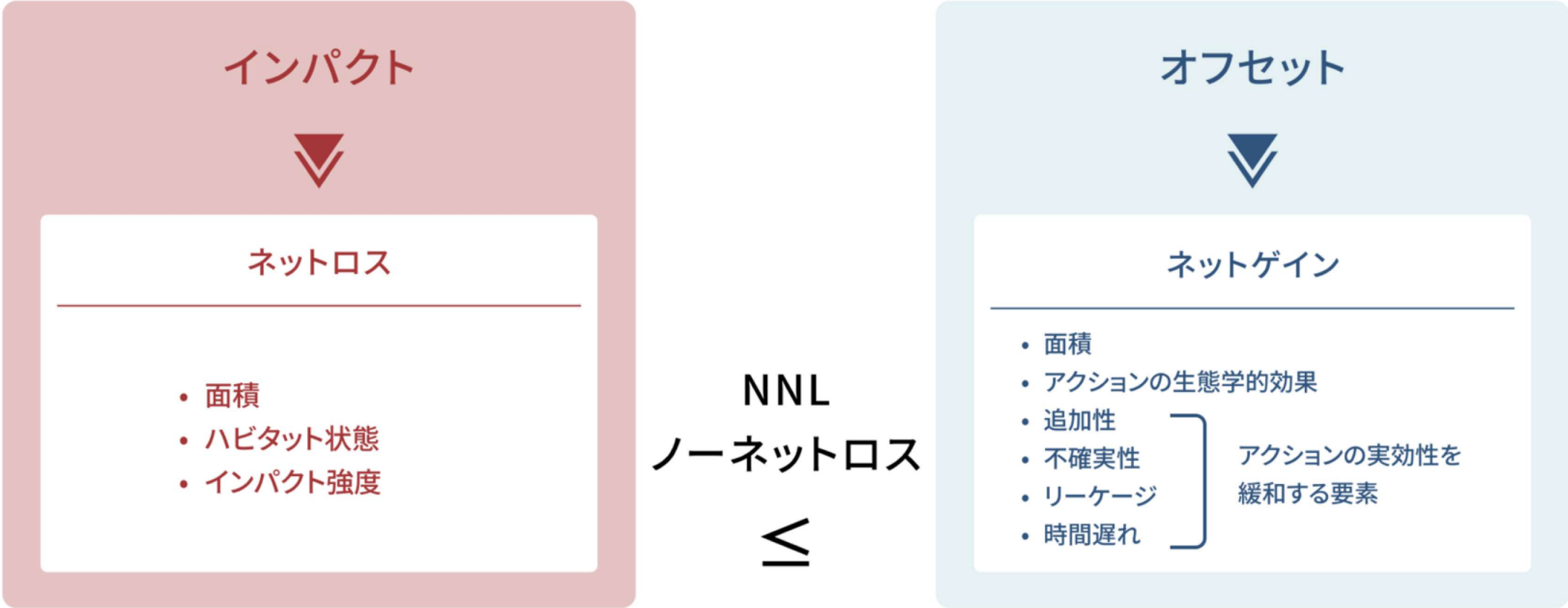
Environmental Modelling and Software 105 (2025) 106322  
Contents lists available at ScienceDirect  
Environmental Modelling and Software  
journal homepage: [www.elsevier.com/locate/envsoft](http://www.elsevier.com/locate/envsoft)

Simple analysis of biodiversity response functions and multipliers for biodiversity offsetting and other applications  
Atte Moilanen<sup>a,b,\*</sup>, Pauli Lehtinen<sup>a</sup>

Renewable and Sustainable Energy Reviews  
journal homepage: [www.elsevier.com/locate/rser](http://www.elsevier.com/locate/rser)

Balancing profitability of energy production, societal impacts and biodiversity in offshore wind farm design  
E.A. Virtanen<sup>a,b,c</sup>, J. Lappalainen<sup>a</sup>, M. Nurmi<sup>a</sup>, M. Viitasalo<sup>a</sup>, M. Tikkanmäki<sup>c</sup>, J. Heinonen<sup>c</sup>, E. Atlaskin<sup>d</sup>, M. Kallasvuo<sup>e</sup>, H. Tikkanen<sup>c,e</sup>, A. Moilanen<sup>b,b</sup>

# 生物多様性オフセットにおけるロスとゲインの会計

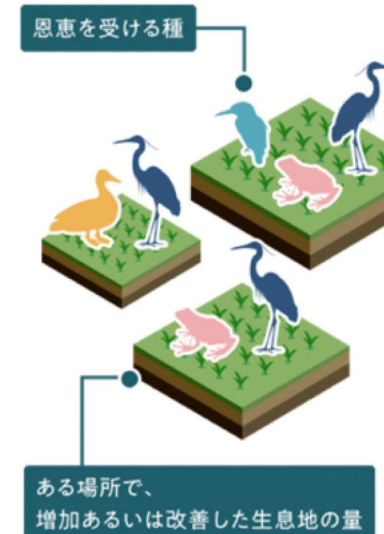
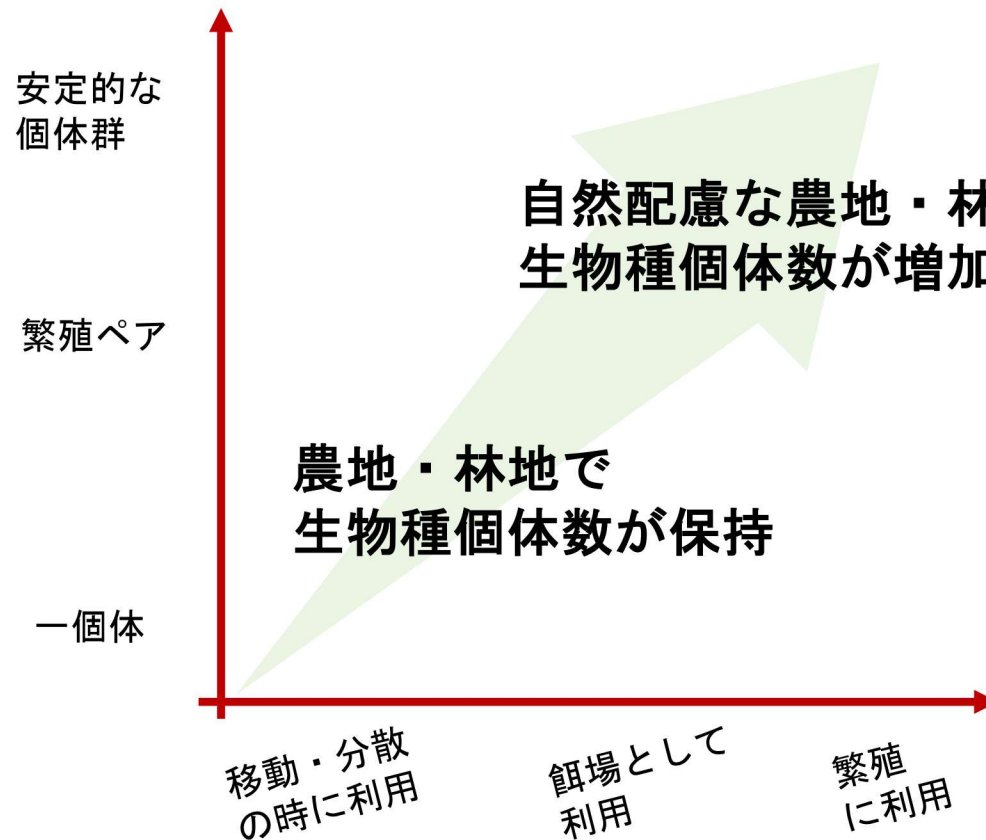


ロスとゲインの差を埋めるために必要な取り組みと面積が明確に

# 生息地の面積と質が生物多様性を支える

農林業地は生物多様性を支える「生息地」として機能している  
よって、農林業活動に伴う自然資本価値を、経済的観点から定量評価する

## 生息地の面積

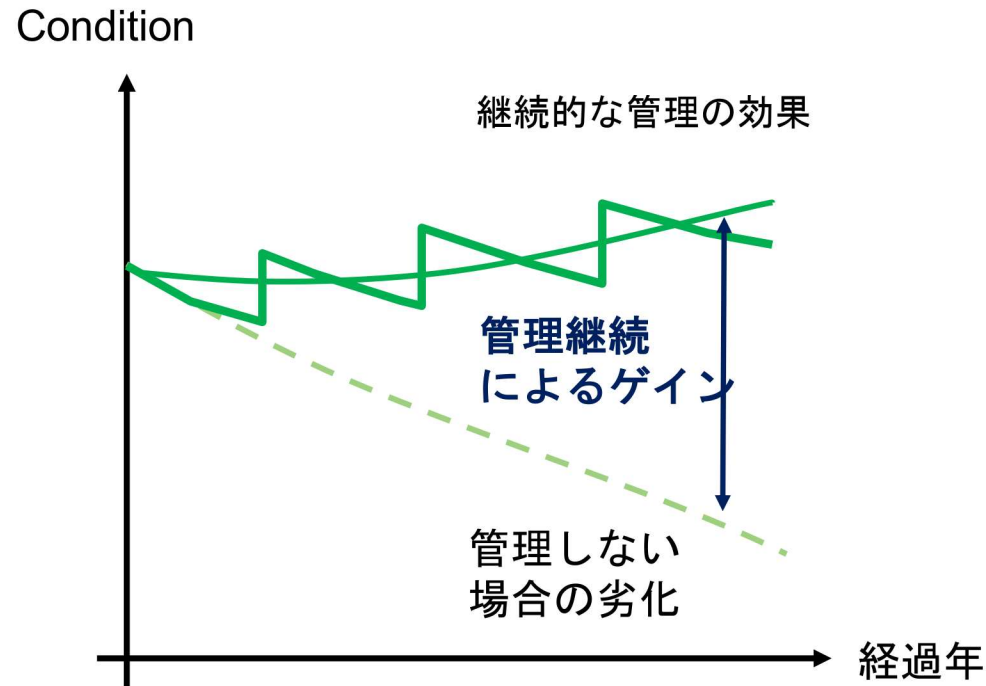


さらに、有機農業や生態学的森林管理に伴う  
生息地の面積・質の増強効果に基づいて  
自然資本のゲインを可視化する

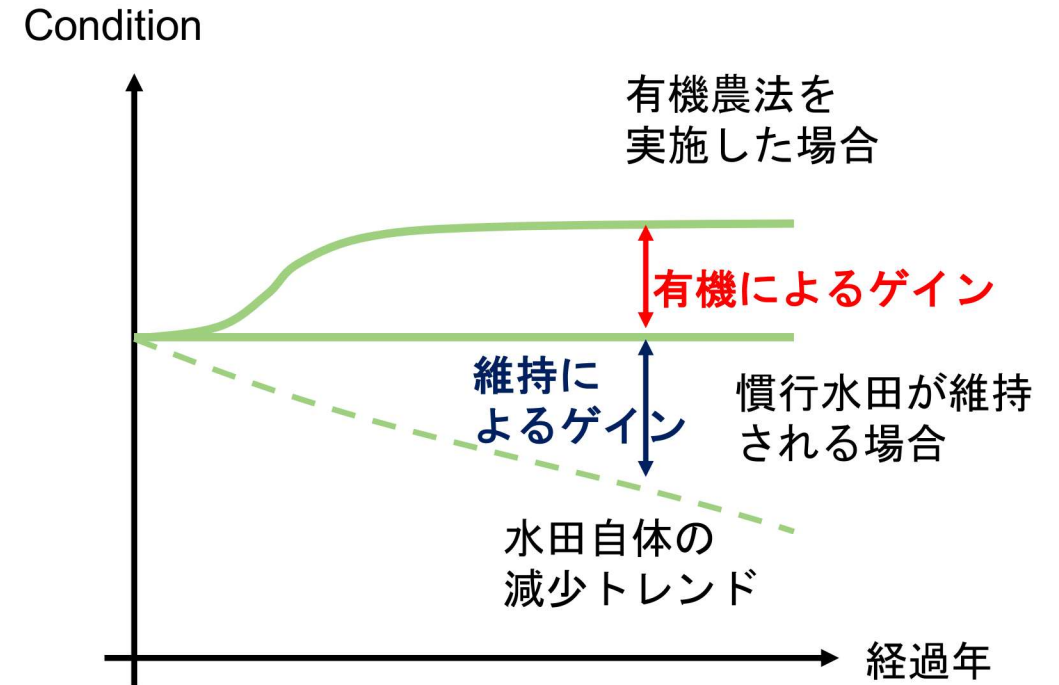
生息地の  
空間構造や  
生産量などの質

# 農林業アクションによるクレジット創出のモデル

半自然草地の管理



水田における有機農法



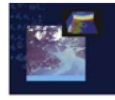
$$\text{ネイチャークレジット} = \text{生息地の質の変化(ゲイン)} \times \text{面積} \times \text{当該生息地の重要性などの係数}$$

# クレジットを計算するために必要な要素



Environmental Modelling and Software

journal homepage: [www.elsevier.com/locate/envsoft](http://www.elsevier.com/locate/envsoft)



Simple analysis of biodiversity response functions and multipliers for biodiversity offsetting and other applications

Atte Moilanen <sup>a,b,\*</sup>, Pauli Lehtinen <sup>a</sup>

<sup>a</sup> Finnish Natural History Museum, University of Helsinki, P.O. Box 17, FI-00014, Finland  
<sup>b</sup> Department of Geosciences and Geography, University of Helsinki, FI-00014, Finland

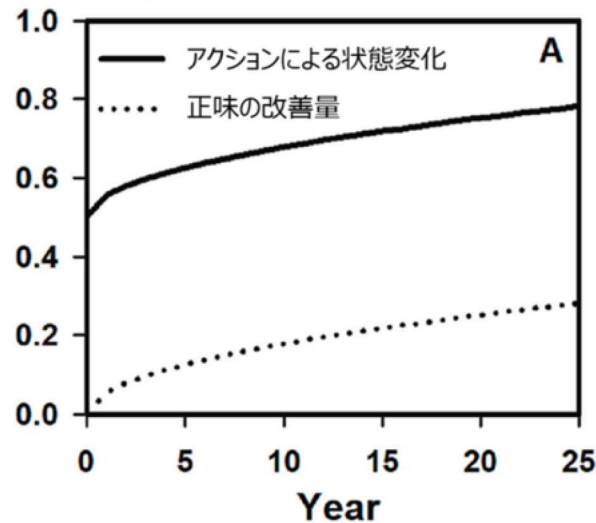
## 生息地の状態

## 時間割引

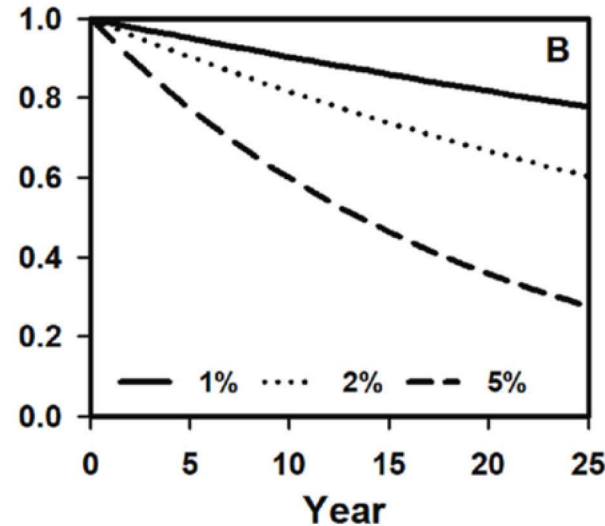
## ベースライン

模式図

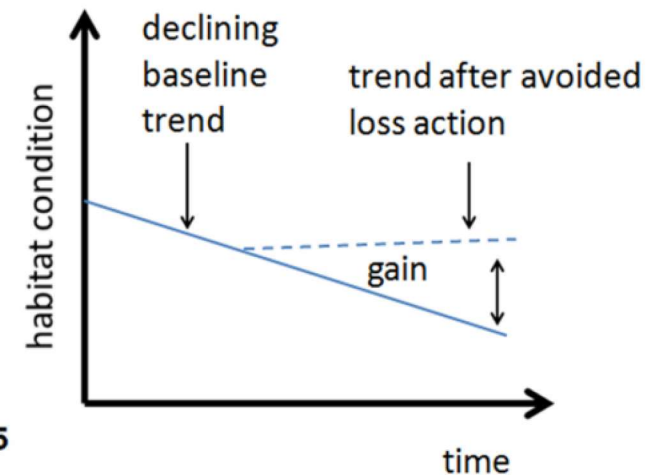
モデル化  
している要素



- ・アクションによる変化
- ・生息地の空間構造
- ・連結性
- ・プレッシャーの状態

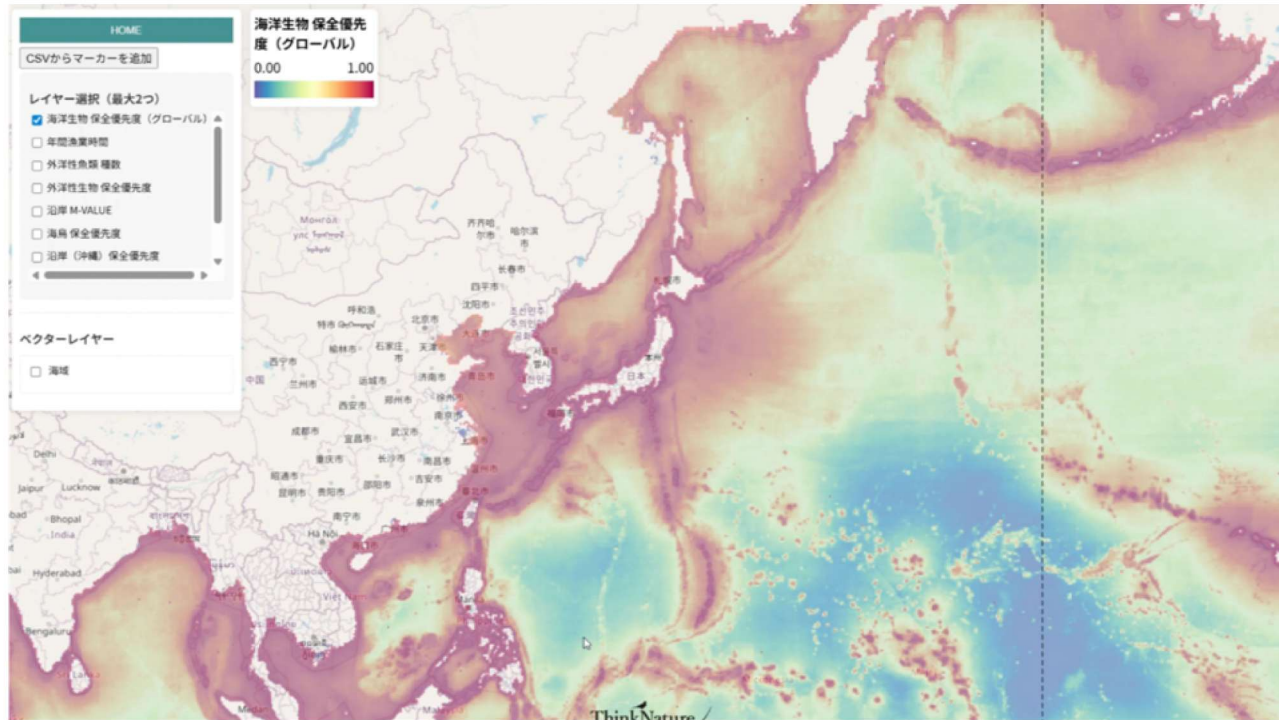


- ・アクションの不確実性
- ・将来価値の目引き
- ・金融商品としてのクレジット

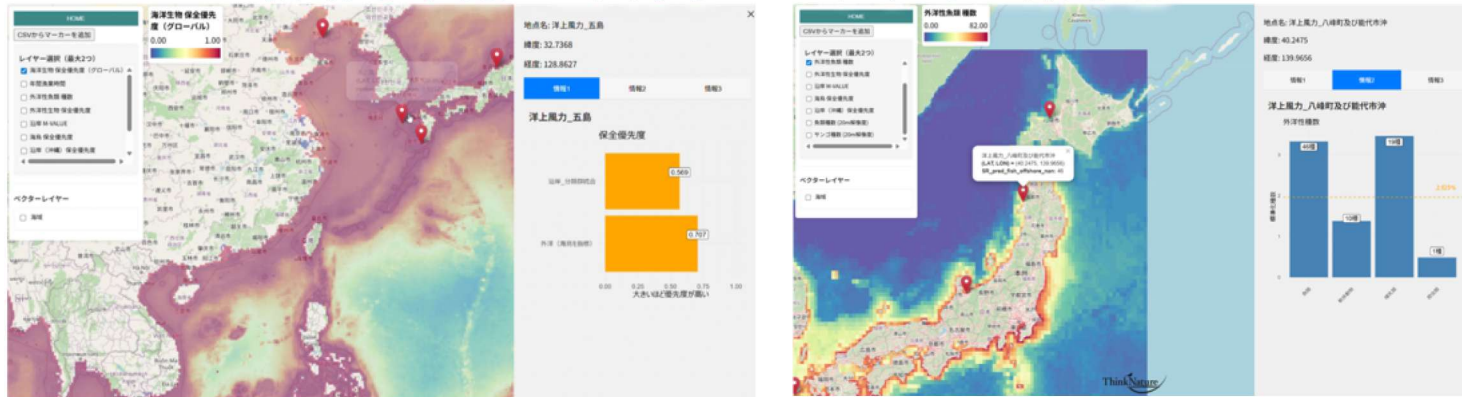


- ・アクションの追加性
- ・損失回避によるゲイン

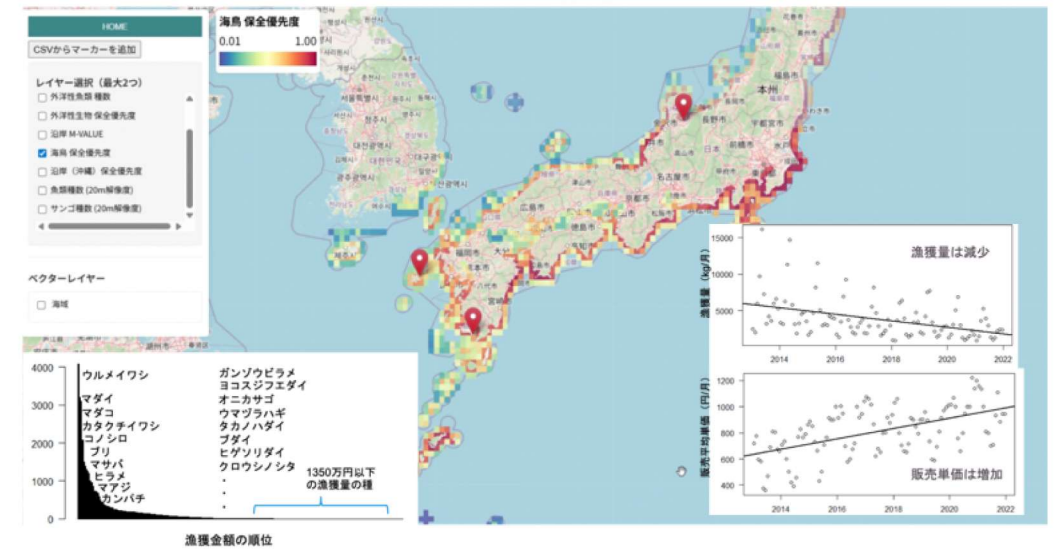
# 海洋自然資本への依存・影響の可視化ツール



## 漁業と調和した洋上風力発電の空間計画： 戦略的環境アセスやゾーニングの立案など



## 地域漁業の水産資源管理



## サンゴ礁の生物多様性可視化



おわりに

- ①皆で科学的な理解を共有
- ②意思決定を少しずつ改善する

→ 自然が守られ、豊かな生活が維持される

## 生物多様性 見える化アプリ

豊かさを知る冒険が、待っている。

# Dugongs AI

ジュゴンズアイ 生物多様性見える化アプリ

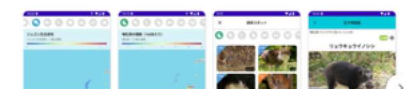


## ジュゴンズアイ

Think Nature Inc.  
4.2★ 1,000+  
4.8のレビュー 9万ダウンロード 3歳以上

インストール

デバイスをお持ちではありません



アプリのサポート



NPJ NATURE POSITIVE JOURNAL  
地球の未来を一緒に考える

Powered by Think Nature

連載記事 | 新着記事 | 私達の知見

Magazines アカデミアから見たネイチャーポジティブ  
日本におけるサンゴ保全再生の現実と課題  
日本では、サンゴ礁生態系の保全再生を目的としてサンゴの移植が進めら…  
2025.10.22 執筆者：大久保幸希 #モニタリング #保全活動 #気候変動 #生物多様性 #自然資本

Magazines ネイチャーポジティブ・ファイナンス  
ファイナンスの基礎から理解する自然資本関連ファイナンス  
ファイナンス一般論 ファイナンスの定義 ファイナンスとは、資金を投…  
2025.10.21 執筆者：旗生 剛 #生物多様性 #自然資本

Magazines アカデミアから見たネイチャーポジティブ  
人新世の生物多様性の黙示録：それが暗示する人類社会の黄昏  
先日、弊社代表取締役CEOの久保田（筑波大学・教授）が参画した国際…  
2025.10.09 執筆者：久保田康裕 #生物多様性 #自然資本 #論文紹介

